

# 山持川川岸遺跡

1996年3月

出雲市教育委員会

# 山持川川岸遺跡

1996年3月

出雲市教育委員会

## 序

鳶巣地区は、出雲市内でも、最も文化財の多い地域の一つであります。

大寺古墳や鳶ヶ巣城跡などの史跡のほか、万福寺には、重要文化財に指定されている仏像群があり、地方では特筆すべきものといえます。

これらの豊富な文化財を活用するために、文化財探訪コースを設けるなど、地元としても熱心な活動がなされています。

このたび、鳶巣地区農業集落排水汚水処理施設を建設するにあたり、山持川川岸遺跡の一部を発掘調査したところ、大きな集落が営まれていたことがわかったほか、県内では珍しい、地震によってできる噴砂も発見されました。

これらの貴重な成果が、郷土の歴史をひもとく縫として、広く活用されることを期待するとともに、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係者の皆さまに心からお礼申し上げます。

平成8年 3月

出雲市教育委員会

教育長 鐘 築 芳 信

## 例　　言

1. 本書は、出雲市農林課（平成7年度に下水道課へ事業は移管）の委託を受けて、山雲市教育委員会が、平成6年度（1994年度）に実施した、鳴尾地区農業集落排水汚水処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 本書で扱う遺跡は、山持川川岸遺跡（山雲市遺跡地図B01）である。
3. 発掘調査は、平成6年5月23日に着手し、平成6年7月2日に終了した。
4. 調査組織は次の通りである。

調査主体　　出雲市教育委員会  
事務局　　野津 建一（文化・スポーツ課長）  
調査指導　　島根県教育委員会文化課  
調査担当者　川上 稔（文化・スポーツ課係長）  
　　　　　　三原 一将（　　同　　主事）  
　　　　　　米田美江子（　　同　　臨時職員）

5. 本書の執筆、編集には、主として川上 稔があたったほか、西田良平（鳥取大学教授）、中村唯史（島根大学大学院生）の両氏からは、それぞれ、噴砂、古環境についての玉稿を賜った。また、田中義昭（島根大学教授）、赤澤秀則（鹿島町教育委員会主事）の両氏からは、有益なご指導、ご助言をいただいた。記して謝意を表します。

6. 遺構の略称記号は、次の通りである。

S K（土坑）　　S I（堅穴住居）　　S B（掘立柱建物）  
S X（その他の遺構）

7. 本書に使用した方位は磁北を示す。

8. 発掘調査、遺物整理、トレース等については、次の方々の協力を得た。

発掘調査　　奥田広信、園山 薫、米山清司、吉田 進、神田千歳、藤原美夫、  
椿 和恵、竹田登美子、小林節子、福岡久一、金篠富雄、三上利枝、  
福代周子、福田忠巳、武永文造、  
遺物整理等　　永田節子、小村睦子、太田和子、遠藤恭子、鶴口令子、飯國陽子、  
石川桂子、川谷真弓、矢田愛子、河井栄子、岡野和栄

# 目 次

序

例 言

目 次

挿 図 目 次

1. 位置と環境 .....	1
2. 調査に至る経緯 .....	3
3. 調査の概要 .....	4
4. 造構と遺物 .....	7
5. 山持川川岸遺跡の噴砂（液状化）について .....	3 8
6. 山持川川岸遺跡の古環境 .....	4 3
7. まとめ .....	4 7

出土遺物観察表

図 版

## 挿 図 目 次

### 1. 位置と環境

第1図 山持川川岸遺跡周辺の遺跡 1~2

### 2. 調査に至る経緯

第2図 山持川川岸遺跡発掘調査区  
周辺地形測量図 3

### 3. 調査の概要

第3図 山持川川岸遺跡遺構全体図 5~6

### 4. 遺構と遺物

第4図 SK 0 1 実測図 7

第5図 SK 0 1 出土遺物実測図 7

第6図 SK 0 2 実測図 8

第7図 SK 0 2 山土遺物実測図 9

第8図 SK 0 3 実測図 9

第9図 SK 0 3 山上遺物実測図 10

第10図 SK 0 4 実測図 10

第11図 SK 0 4 出土遺物実測図 11

第12図 上器群 1 実測図 12

第13図 下器群 1 出土遺物実測図 13

第14図 土器群 2 実測図 14

第15図 土器群 2 出土遺物実測図 15

第16図 土器群 3 実測図 16

第17図 上器群 3 出土遺物実測図 17

第18図 上器群 3 出土遺物実測図 18

第19図 土器群 4 実測図 19

第20図 上器群 4 山土遺物実測図 20

第21図 土器群 4 出土遺物実測図 21

第22図 下器群 5 実測図 21

第23図 下器群 5 出土遺物実測図 22

第24図 下器群 6 実測図 22

第25図 上器群 6 山土遺物実測図 23

第26図 上器群 6 出土遺物実測図 24

第27図 下器群 7 実測図

25

第28図 下器群 7 出土遺物実測図

25

第29図 下器群 8 実測図

26

第30図 下器群 8 出土遺物実測図

26

第31図 ST 0 1 実測図

27

第32図 SI 0 1 出土遺物実測図

28

第33図 SI 0 1 山土遺物実測図

29

第34図 SB 0 1 実測図

30

第35図 SB 0 1 出土遺物実測図

30

第36図 その他の出土遺物実測図

32

第37図 その他の出土遺物実測図

33

第38図 その他の出土遺物実測図

34

第39図 その他の出土遺物実測図

35

第40図 その他の出土遺物実測図

36

第41図 石製品・土製品実測図

37

### 5. 山持川川岸遺跡の噴砂(液状化)について

写真1 液状化による砂脈の分布 38

図 1 砂脈の柱状図(噴砂模式図) 39

図 2 砂脈の平面図(噴砂平面図) 39

図 3 地震活動分布図 40

### 6. 山持川川岸遺跡の古環境

図 1 山雲平野西部の地形 44

図 2 山持川川岸遺跡の層序 45

写真1 粗粒砂層にみられる斜交葉理 46

### 7. まとめ

第42図 山持川川岸各期遺物変遷図 48~49

第43図 山持川川岸各期遺物変遷図 50~51

## 1. 位置と環境

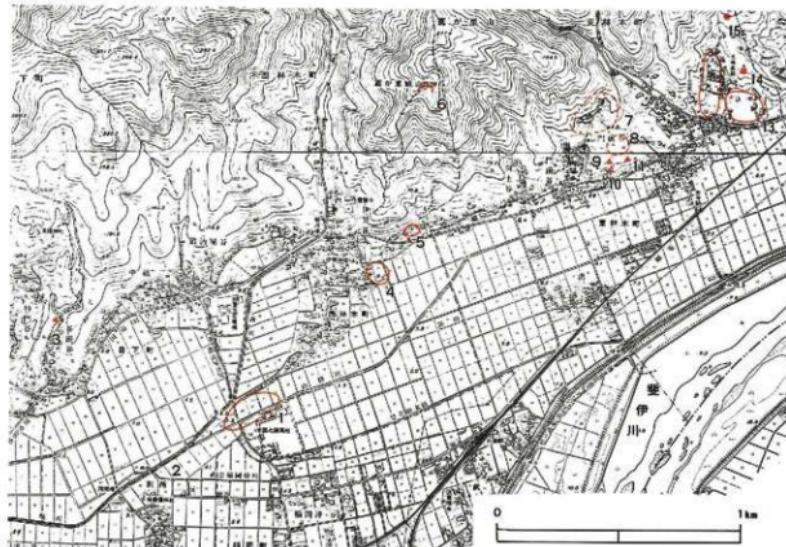
（山持川川岸遺跡）

山持川川岸遺跡は、出雲市街地の北方4kmの北山山麓に所在する。北山の南500mを、東から西に向かって、沿うように流れている山持川沿いに広がっている遺跡で、これまでに、東西200m、南北100mにわたって弥生時代から古墳時代にかけての多量の遺物の散布が確認されている。

遺跡のすぐ北には、北山の伊勢谷に形成された小扇状地が展開し、南には、丘陵から流れ出た斐伊川を眼前に眺む。また、東西には、斐伊川と神戸川によって生成された出雲平野が細長く横たわり、豊かで肥沃な穀倉地帯となっている。

山持川川岸遺跡は、斐伊川が押し流してきた碎屑物をベースとした微高地に営まれた集落遺跡であり、出雲平野における典型的な遺跡立地といえる。

出雲平野での遺跡の初現は、縄文時代早期に遡る。この頃の地形環境は、氷期が終わって海水準が上昇し、ほぼ現在と同じ高さに海水準があったと考えられているが、現在の沖積低地のほとんどは海水域であり、出雲砂丘地の上長浜貝塚と北山山麓の菱根遺跡の二カ所が知られているに過ぎない。そ



第1図 山持川川岸遺跡周辺の遺跡

1. 山持川川岸遺跡
2. 里方別所遺跡
3. 矢尾横穴墓群
4. 龍善寺東遺跡
5. 東組遺跡
6. 蔦ヶ巣城跡
7. 平林寺山古墳群
8. 膳棚山古墳群
9. 古前西北崖上横穴墓
10. 古前背後横穴墓群
11. 傘屋背後横穴墓群（消滅）
12. 大寺谷遺跡
13. 大寺三藏遺跡
14. 大寺古墳
15. 広瀬古墳（消滅）

の後、海面極頂期を経て弥生時代になると、出雲平野にも数多くの遺跡が営まれるようになってくる。特に、弥生時代中期には、神戸川によって生成された旧自然堤防上に、矢野遺跡、天神遺跡、古志本郷遺跡などの拠点的集落が急激に広がり、海退に伴う可耕地の拡大が集落の増加を促したものと考えられる。

山持川川岸遺跡は、やや遅れて、弥生時代後期には急速に発展し、矢野遺跡に代表されるような人規模集落になるが、やがて古墳時代になると、他遺跡とはほぼ時を同じくして、集落としては消滅していく。

しかし、やがて、県内最古の前方後円墳とされる大寺古墳が築造されていることからもわかるように、出雲平野西部においては、この北山山麓でいち早く集落の回復をみており、さらに後期には、平野中央部の今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳に代表される人形横穴式石室墳には及ばないものの、大谷川と畠谷川が合流した湯屋谷川の右岸には、市内最大の方墳をはじめとする5基で構成された膳棚山古墳群や、内部土体に横穴式石室や箱式石棺をもち、8基で構成された平林寺山古墳群などの群集墳や、古前後横穴墓群などの横穴墓が、古墳時代を通して継続して集落が維持されてきていることを示しており、この地域が、地理的にみて斐伊川下流域の要衝の地にあたっていたことを裏付けている。

さらに、奈良時代になると、733年に編纂された『出雲國風土記』によれば、当時、西流して神門水海に注いでいた斐伊川の北側にあたるため、平野部の沖積低地の多くが神門郡に属するのに対し、現在の巣巣地区は、出雲郡伊努郷にあたり、行政区を異にしていた。『出雲國風土記』には、この付近の当時の様子について、山雲大川（現在の斐伊川の下流域の呼称）の条に、「河の両辺は、或るは七地豊かに沃えて土穀・桑・麻・稔り款枝に、百姓の膏腴の蘭なり。或るは上体豊かに沃えて、草木叢り生ひたり。（中略）河口より河上の横田村に至るまでの間、五つの郡の百姓、河に便りて居めり孟春より起めて季春に至るまで、材木をふる船、河の中を沿渉る。」と記載しており、物資流通や生産の基盤の大動脈である斐伊川流域の豊かさを示している。山持川川岸遺跡周辺でも、湯屋谷川に近い大寺谷で奈良時代以降の遺物がかなり出土した大寺三藏遺跡が知られているほか、北山山麓にある高浜川遺跡、里方別所遺跡などが広く分布しており、山雲平野西部における遺跡集中地区のひとつとして、『出雲國風土記』の記載を裏付けている。

また、大寺谷の扇状地からは、素弁蓮花文軒丸瓦が採集されているほか、かつて、この谷奥に存在していた大寺が、慶安年間の山崩れで破壊された際に土中より掘り出した仏像群が、現在万福寺の仏像収蔵庫に保管収蔵されている。薬師如来像をはじめとする平安時代の9軀の仏像は、山陰地方の仏像の中でも一級の価値があるものとされ、国の重要文化財に指定されている。

さらに、中世には、市内でも最大規模の山城である篠ヶ城が築城されている。毛利元就が尼子氏の富田城攻略をめざし、出雲平野の拠点地域としてこの地を選び、幾多の戦国合戦の舞台となっている。

このように、山持川川岸遺跡周辺は、出雲平野の一地域にとどまらず、その地の利からかなり重要視されてきた地域として、今日に至っているといえる。

## 2. 調査に至る経緯

山持川川岸遺跡は、昭和37年の山持川改修工事のときに、地元の郷土史家新宮氏が遺物を表探ししたことによって発見された遺跡である。その際に、弥生時代後期を主体とする土器が、山持川沿いの約200mにわたって分布することが確認されている。

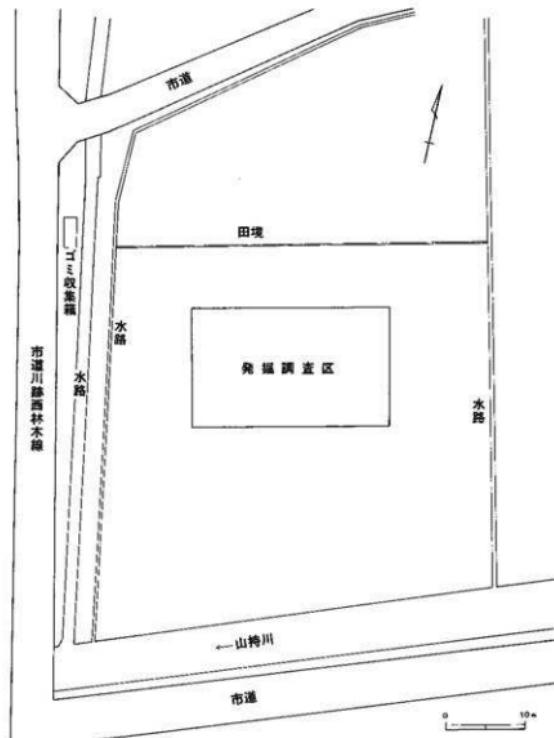
その後、昭和55年に、山雲北陵高等学校が建設されるとき、山雲市教育委員会が行なった事前試掘調査の際に粘質土中から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土し、当該期の良好な資料がまとめた遺跡として注目されている。

今回は、山雲市農林課（事業は平成7年度に下水道課に移管）が、葛巣地区農業集落排水汚水処理施設を計画したことに伴うものである。汚水処理施設建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である山持川川岸遺跡の範囲に含まれているため、事前確認の試掘調査を平成6年3月24日に実施した結果、試掘グリッドの全ての粘質土中から、弥生土器、土師器が出土した。

そのため、汚水処理施設建設部分について、本調査を平成6年5月23日に着手した。稲作の時期とも重なったこともあり、水処理に悩まされたが、同年7月2日に現地発掘調査を終了した。

調査の結果、これまで伊努谷扇状地の扇端に集落があり、いらなくなった土器を南側の湿地に投げ捨てたものと考えていたが、今回の調査によって、集落そのものがこの地点にあることが明らかになった。出土土器の量も予想を超えた膨大な量であり、かなり大きな拠点的集落があったことが予想され、堅穴住居や掘立柱建物なども検出されている。

また、噴砂とよばれる現象が調査区全面に検出されるなど、貴重な成果が得られ、調査の概要については、同年7月9日に葛巣公民館で説明会を開催した。



### 3. 調査の概要

この遺跡は、北山山麓に点綴する小扇状地のひとつ、伊努谷扇状地の前面に位置している。鳩巣地区汚水処理施設建設予定地に、南北15m、東西25mの調査区を設定するため、最初に試掘調査の知見をもとに、昭和39年の土地改良事業による盛土部分を重機により掘削し、地表から約1m下で5×5mのグリッドを15区画設定した。調査した地点は、この付近でも土地改良前には最も低く、かなり水はけが悪かったらしいが、土地改良後の現在の水田の標高は4.1mで、盛土下の遺構検出面でのレベルが2.8mとなっている。

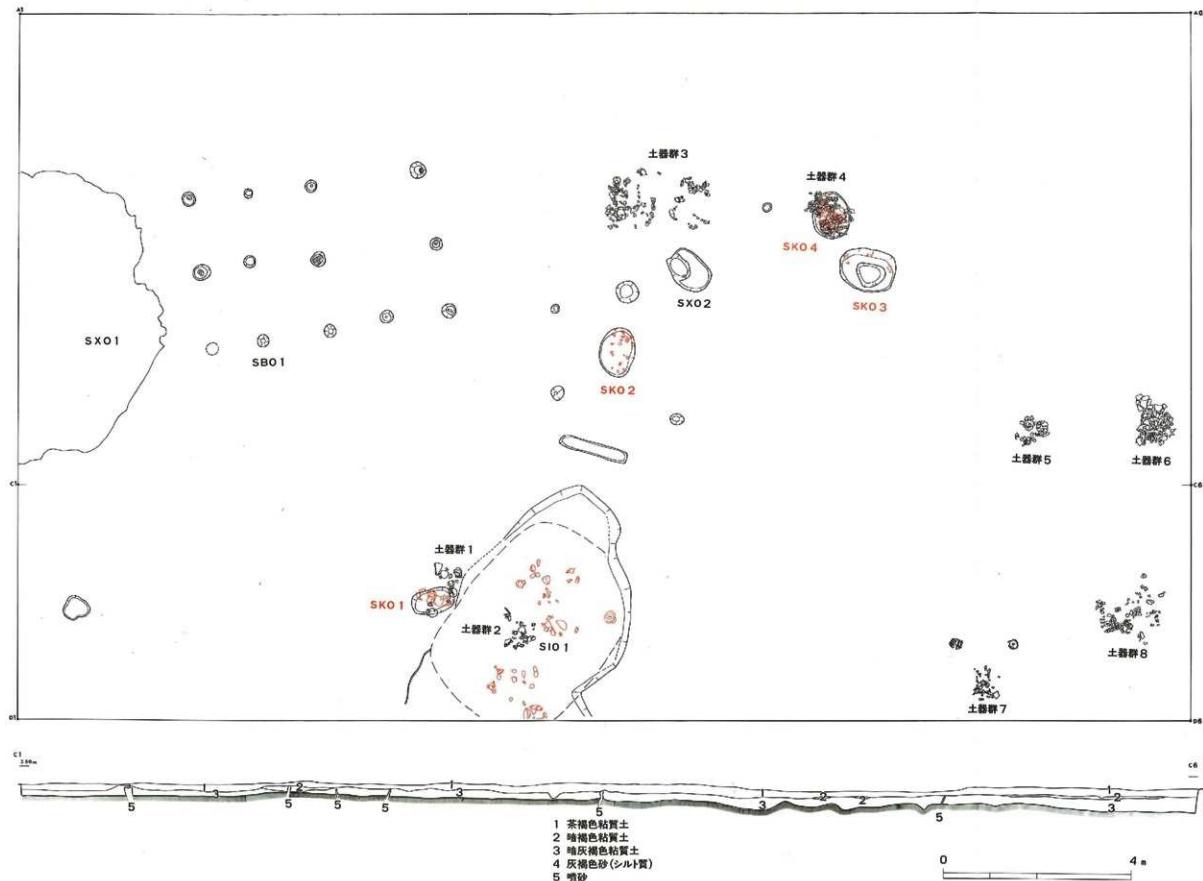
調査区での層序は、上層から、盛土（昭和39年土地改良事業による）、黄灰色砂、茶褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、灰褐色シルト質砂、灰白色砂、淡褐色砂となっており、灰褐色シルト質砂をベースにした上位三層（茶褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗灰褐色粘質土）に遺物が含まれている。このうち、暗褐色粘質土は、層厚も約5cmと薄く、その分布範囲も局所的であり、堆積後に削平された可能性はあるものの、普遍的に堆積しているかどうか不明である。しかし、この層の上下の茶褐色粘質土と暗灰褐色粘質土は安定しており、20cm前後の堆積がある。

遺物は、コンテナ約40箱分の弥生時代中期後半から古墳時代にかけての土器を中心として出土している。弥生時代後期後半の遺物が最も多いが、比較的磨耗が少なく、破片も大きめなものが多い。

遺構は、調査区全面にわたって検出している。検出した遺構は、弥生時代後期後半に集中し、竪穴住居1軒、土坑4基、掘立柱建物1棟がある。これまでの試掘調査によって、粘質土中から遺物が出土していることからみて、伊努谷扇状地の扇端付近に集落を営んでいた人たちが、前面の低湿地に上器などを廃棄したものと考えていたが、今回の調査によって遺構が明らかとなり、この地点が集落跡であることが実証された。現在は湿地であるが、生活していた当時は現在と環境が異なり、生活するのに支障のない生活に適した場所であったことがわかる。

また、土器群（上器陶器）も8ヶ所で検出している。これらは、比較的小さなものから大きなものまであるが、径1~2mの範囲に折り重なるようにして集中した状態で検出したものをピックアップしている。ほとんどが弥生時代後期後半で、古墳時代初頭と考えられるものが1ヶ所あった。なお、上器群にはしていないものの、土器が濃密に分布している箇所もあり、特にC2グリッドで多く出土している。

さらに、この遺跡の調査での貴重な知見として噴砂がある。噴砂とは、平野の地表面下の地層で地下水を含んでいるときに、強い地震があると、砂層中の地下水の水圧が上昇し、液化した砂と水が表層地盤にできた割れ目に沿って上昇し、地表に砂や水を噴出する現象で、今回の調査区の全面にわたって幅5~10cmの細かい帶状の砂脈が検出されている。砂脈の方向にも、ある程度の規則性がみられ、南北方向と、東北東-西南西がある。このような噴砂は、近年全国各地の発掘調査で確認されるようになってきたが、島根県内においては、松江市の原の前遺跡が初見である。<sup>(注1)</sup>砂脈の水平分布が確認できた調査例は、県内では今回の山持川川岸遺跡がはじめてであり、貴重な成果といえる。今回の調査では、上層が土地改良により削平されていたため、噴砂の時期を特定できなかったが、今後の北山山麓での発掘調査で明らかになる可能性は高く、将来の地震予測に役立つことが期待できる。

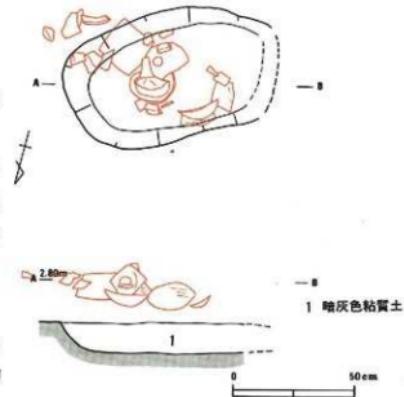


第3図 山持川川岸遺構全体図

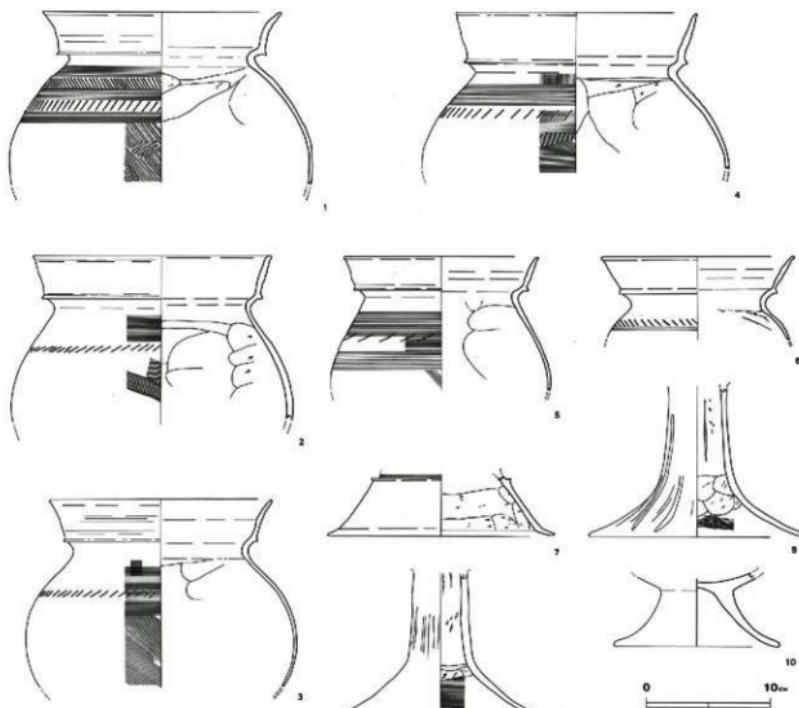
## 4. 遺構と遺物

### 土坑

今回の調査で検出した土坑は4基である。SK 01はC2グリッド、SK 02はB3グリッド、SK 03はA4南側のセクションベルト、SK 04はA4グリッドで検出している。SK 03とSK 04が近接しているが、この調査区でみる限りでは、位置的に特に集中しているとはいえない。土坑の平面プランは、隅丸長方形や椭円形だが、規模は長さ0.9~1.2m、幅0.5~0.9mで、形態的、規模的によく似ている。しかし、土坑内での遺物の入り方からみてみると、やや異なっている。



第4図 SK 01実測図



第5図 SK 01出土遺物実測図

SK 0 1 では、遺物は上層に浮いた状態で出土し、坑底にはみられない。また、SK 0 2 と SK 0 3 は、量的にも少なく、偏在していない。SK 0 4 は、土器群 4 の直下から検出されている。

なお、4 基の土坑のほかにも、同種土坑の可能性のあるものが見受けられた。A 1 の東南隅付近には、擾乱によりほとんど形は失われていたが、長さ 1.5m、幅 1m（推定）、深さ 0.2m 程度の落ち込みを確認している。また、B 1 グリッドでは、大規模な噴砂の可能性があった SX 0 1 を、発掘調査の最後に重機で掘さくしたときに、その回りに掘り残しておいた部分（SX 0 1 の砂が多量の水を含んでいたため）の下から、径 0.7m（推定）、深さ 0.4m の落ち込みを検出した。その最上部には貝類の集積を確認しているが、これらについては土坑として含めていない。

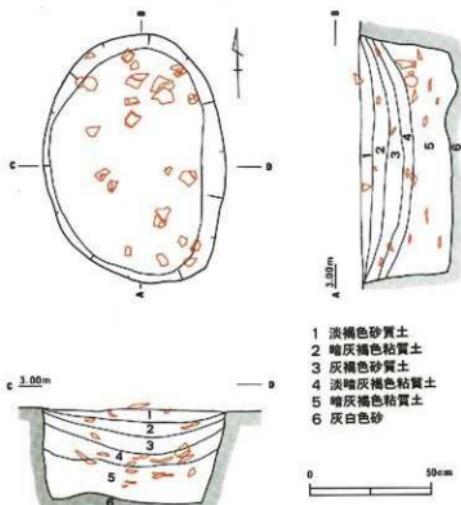
#### SK 0 1（第 4 図、第 5 図）

C 2 グリッドで検出した土坑で、すぐ東には SI 0 1 を検出している。C 2 付近は、今回の調査でも、最も多くの遺物が出土しているが、この土坑のすぐ近くの上面に土器群 1 がある。

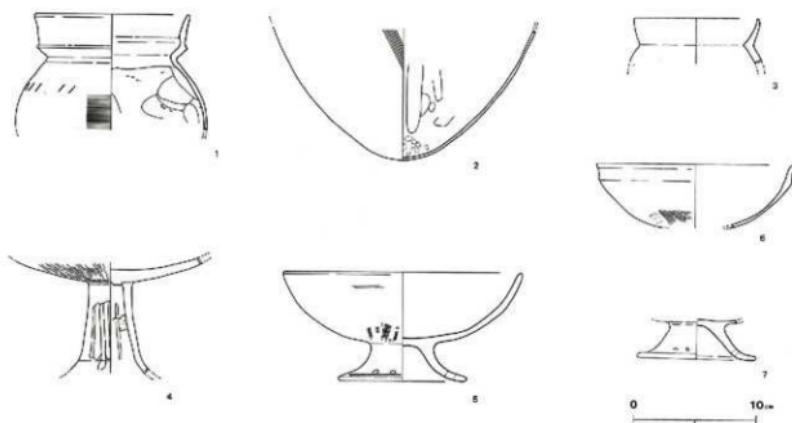
土坑は、東西方向を長軸とした長さ 0.9m、幅 0.5m、深さ 0.15 m の比較的小さな規模で、西側の一部は削られて失われている。土坑の底から浮いた状態で、最上面からまとまって出土しており、甕、器台、高坏、低脚坏などがある。これらのうち最も多い器種は甕で、いづれも口縁部は外反し、薄く引き出した形状を呈する。体部外面には列点文やハケメを施し、内面は、頸部以下に大きなケズリを入れている。高坏（5-8、9）は、細く立ち上がった脚上部と、大きく開く脚下部が特徴で、外面には、タテ方向の細かなヘラミガキを施している。低脚坏（5-10）は、低脚部からみて、かなり大形の坏部をもつ。これらは、おおむね、山持川川岸 3 期に含まれると考えられる。

#### SK 0 2（第 6 図、第 7 図）

B 3 グリッドで検出した土坑で、ほぼ南北方向に主軸をもつ。長さ 1m、幅 0.75 m、深さ 0.4m の規模で、側壁は急な角度で立ち上がる。土坑内には、砂質土と粘質土が互層に入っている。底面は灰白色砂まで掘り込んでいる。遺物は、上層から下層まで、また、平面的にも万遍なく出土しているが、量的には多くはない。甕（7-1）は、口縁端部にやや厚みのあるもので、また、肩部の列点文は体部を繞らず、部分的に施文する特徴をもつ。甕（7-2）は、かすかな平底を意識しているもので、内面底部には指頭圧痕がある。小形壺（7-3）は、やや内湾する短い口縁をもち、胎土が精良な搬入系遺物と考えられるものである。低脚坏（7-5、6、7）は、比較的大

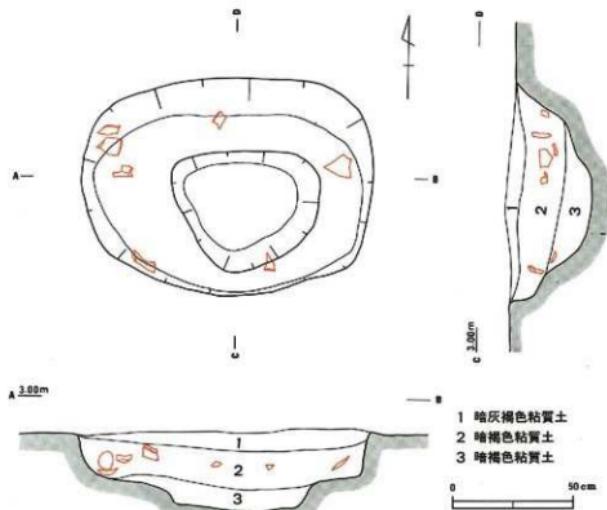


第 6 図 SK 0 2 実測図



第7図 SK 02出土遺物実測図

形の深い杯で、むしろ低脚椀とでも呼ぶべきものであり、5、7には、低脚部に貫通する双孔がある。これらは、SK 01よりも、時期的にやや新しい要素をもっており、おおむね山持川川岸4期と考えられる。



第8図 SK 03実測図

### SK 03 (第8図、第9図)

SK 03は、SK 04の南側に近接して検出した土坑で、A4グリッド南端のセクションベルトの下で認められ、当初はSK 04の一部とみられたが、精査の結果、SK 04とは別の土坑であることが判明したものである。

土坑の平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.2m、幅0.9mで、二段掘りとなっており、中央部の深い部分は、長さ0.6m、幅0.5mをはかり、上面からの深さは、現状では0.3mの比較的浅い土坑である。今回検出した土坑の中で、有段土坑は、この土坑のみである。

遺物は、2層目の暗褐色粘質土から出土しており、中央部の深い部分からは出土していない。遺物の量も極めて少ないが、壺の口縁部の特徴などからみて、山持川川岸3期と考えられる。

### SK 04 (第10図、第11図)

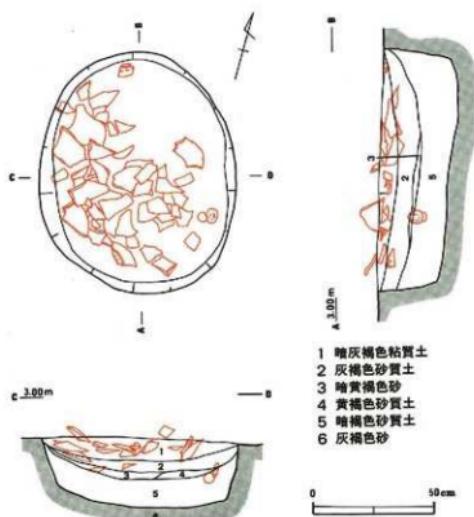
SK 03のすぐ北側に位置する土坑で、平面プランは楕円形を呈する。長さ1m、幅0.8m、深さ0.3mの形の整った土坑で、粘質土、砂質土、砂の互層の堆積となっている。

この土坑は、上面に土器群4があり、この土器群の調査を終えてはじめて、その下からプランを検出した。坑内の土器の出土状態をみると、そのほとんどが最上層から出土している。平面図にみる土器のほとんどは大形の壺(11-1)であり、この土器は、SK 04に伴うものというよりは、むしろ上面の土器層である土器群4の最下層の遺物とみた方が妥当かもしれない。ただ、土器群4とSK 04は、時期的には、ほぼ同時期と考えられるので、SK 04の上に土器群4があるということも想定できる。しかし、この遺跡での土器群と土坑の関係をみてみると、土器群の下に土坑が存在する例は、土器群6にその可能性があるに留まり、また、SK 01に土器がやや集中していた程度であり土坑そのものに供獻などの用途で土器群がセットとなる可能性は薄いと考えられ、即断できない。

出土遺物は、ほとんどが土器で、壺(11-1)は、かなりの大形品であり、口径35cm、器高44cm(推定器高50cm)で、底部付近を欠いている。倒卵形の体部と

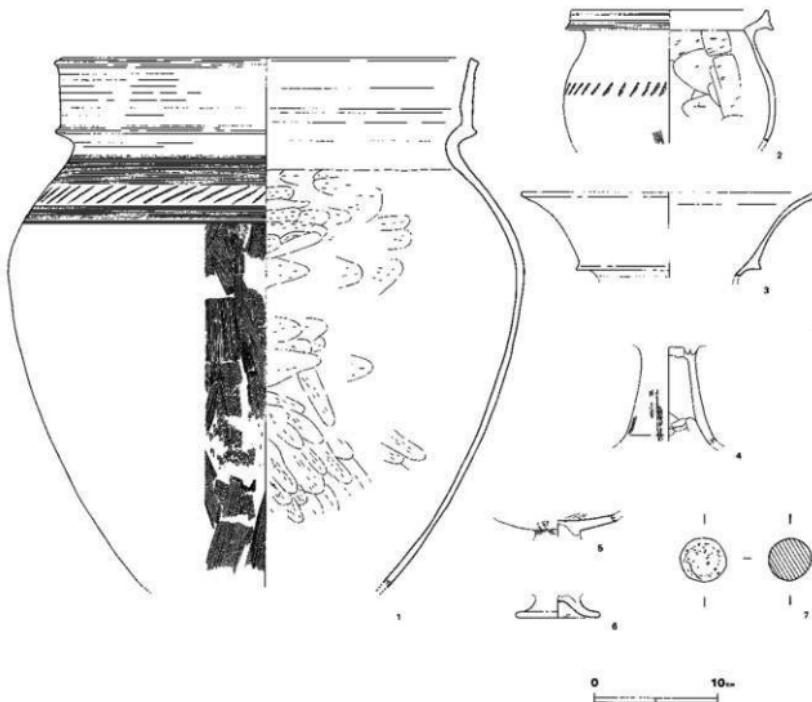


第9図 SK 03出土遺物実測図



第10図 SK 04実測図

垂直に立ち上がる口縁部をもち、その端部は、やや外側に傾いてはいるが、平坦面をなしている。体部の外面は、肩部を列点文や平行沈線で飾り、それより下はハケメを施している。内面は、頸部以下の中上半分をヨコ方向、下半分を下から上へのケズリを施している。底部は欠いているが、同形態の土器は、大きさはやや小さいが、C 3から出土（37-15）しており、底部は平底になると考えられる。壺（11-2）は、この山持川川岸遺跡では量的に少ない弥生時代中期後半（出雲・岐岐IV-2様式<sup>（注2）</sup>）の遺物で、混入したものである。低脚壺（11-5、6）は、同一個体と考えられる土器で、低脚部と壺部との接合方法が良くわかる遺物である。丸い小碟（11-7）は、最下層の上部付近から出土した砂岩の丸石で、その脇からは低脚壺が出土している。遺構に何らかの関連があるかどうか不詳である。これらの遺物からみて、SK 04は、SK 01、SK 03と同時期の山持川川岸3期のものと考えられる。



第11図 SK 04出土遺物実測図

## 土器群

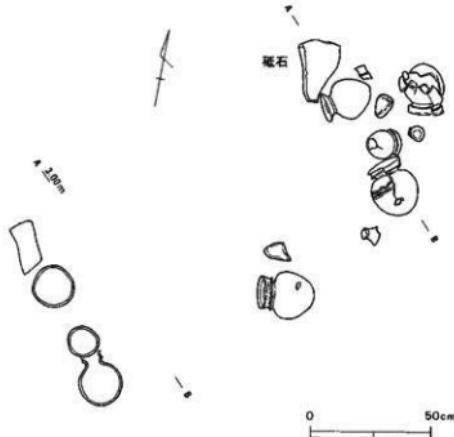
山持川川岸遺跡では、堅穴住居、掘立柱建物跡などの遺構を検出しているが、それとともに、夥しい量の土器も出土している。それらは、調査区全面にわたって認められ、遺物を包含する上層は、上から順に、茶褐色粘質土、暗褐色粘質土、暗灰褐色粘質土である。このうち、暗褐色粘質土は、層の堆積後に削られた可能性はあるが、他の二層に比べて、かなり薄く、かつ局所的で、遺構としても、SB01の他には見当らない。上層の茶褐色粘質土は、古墳時代以降の遺物を包含するが、そのほとんどは古墳時代のもので、遺物の量は少ない。遺物の多くは、下層の暗灰褐色粘質土から出土したもので、弥生時代後葉の土器がほとんどであり、遺構の多くも該時期のものである。

それらの上器のうち、集中して山上した、いわゆる土器溜りが8ヶ所あり、本書では、土器群として報告している。8ヶ所のうち、上層の茶褐色粘質土のものは土器群2のみで、他はすべて、下層の暗灰褐色粘質土に認められたものである。そのうち、上器群4のみが、その下層に土坑が存在し、土器群6にその可能性があるが、他の上器群は、直接的な遺構との関連ではなく、いわゆる土器溜りを形成しているものである。

なお、上器群として扱ってはいないが、C2付近からは、かなりの量の土器が万遍なく山上したほか、B5でも、土器群6の北側で、遺物が多く出土している。

土器群1（第12図、第13図）

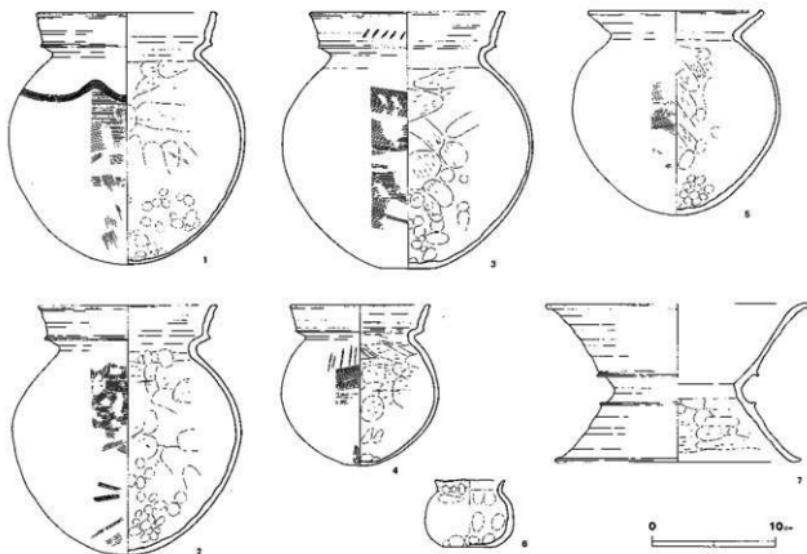
S101の西側に接する位置のC2グリッドに認められた土器溜りである。他の土器群が、粉々に割れた小片が散乱している状態で山上しているのに対して、この上器群は、完形や、ほぼそれに近い状態の上器がほとんどで、この遺跡の中でも特異な土器群といえる。遺物としては、小片をのぞくと7個体の土器が認められ、甕5、器台1、手捏土器1となっている。甕は、口径12~15cm、器高20cmの向形態のものが3個体あるほか、やや小形の口径10cm、器高13cmの甕や、布留甕の特徴をもつもの



第12図 土器群1実測図

1個体がある。これらは、1×0.7mの範囲に、形を保って、ほぼまとまった状態で山上しているが甕1個体は少し離れている。なお、土器のすぐ近くからは、長さ20cm以上もの大きな砥石が出土している。土器群の下層には、土坑などの遺構はなく、すぐ東側にあるS101は、時期的に異なるので、関連はない。また、すぐ南側のSK01も、部分的には重なるものの、土器群1はその上層から出土しているうえ、位置的にも少しずれており、また、時期が少し遡るので、関連はないと考えられる。

遺物として多いのは甕で、甕(13-1)は、複合口縁の端部が平坦で、複合部の



第13図 土器群1出土遺物実測図

後は、ほぼ真横に突出している。体部はほぼ球状で、底部は丸底である。外面肩部には、波状文を施し、内面は、頸部以下の上半分をヨコ方向、下半分を下から上へのケズリを施し、底部付近から6cm上までに、多くの指頭圧痕がある。壺(13-2)は、複合口縁の端部に、押しつけた平坦面をなすが、1とくらべるとやや外側に張り出している。上器の法量は1とほぼ同じで、肩部に波状文がないものの、形態的にはほぼ同じである。壺(13-3)は、プロポーションは1、2とほぼ同じだが、2点だけ異なっている。1点は複合口縁部の外面に、クシ状工具によるとみられる列点文が5列あり、これは施文する位置に違いはあるが、SK02の壺(7-1)にみられた肩部への部分的な施文と共通する特徴をもつ。もう1点は体部は球形化しているが、底部に平底のなごりが残っている点で、この土器群の中では、小形壺(13-4)にも認められる。壺(13-4)は、1、2、3にくらべて半分位の大きさしかない小形のものであるが、肩部に5本の斜行する長さ1~2cmの平行沈線を施している。これは、今回の調査では唯一のものであるが、3の列点文と共通する要素と考えられる。また、底部は、平底のなごりが残っており、この点も3とよく似ている。壺(13-5)は、布留壺の特徴である口縁端部の内側をやや肥厚させる単純口縁をもつ壺で、器形がよくわかるものは、この遺跡では唯一のものである。口径14cm、器高17cmの上器で、形態は布留壺の特徴をもつが、胎土は在地のものである。プロポーションは在土地器とは異なるものの、体部外面にハケメ、内面に、頸部以下のケズリと底部付近の指頭圧痕の調整構成は在土地器と共通している。手押上器(13-6)は、口径6cm、器高5.5cmの底がほぼ平らな短頸のもので、体部外面に指頭圧痕が多く付いている。器台(17-6)は、通有の鼓形

器台である。

これらの土器は、その山土状態からみて、ほぼ同時期の一括資料と考えられるが、布留系統の特徴をもつ壺が存在することから、やや古い要素はあるものの、古墳時代前期初頭の山持川川岸5期の範疇に含まれるものと考えられる。

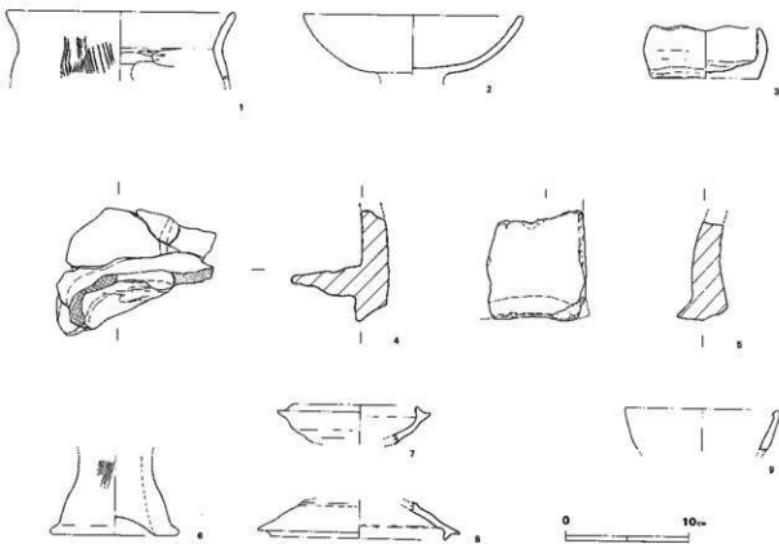
#### 上器群2（第14図、第15図）

今回の調査で、最初に検出した上器群である。C3グリッドの西側部分の約1m四方に、土器や石が集中していたが、下器群としては量的に少ない。この付近には、同レベルから、青めのう原石をはじめ、土器片がかなり出土しているが、さらに下層には、S101が検出されている。この遺跡では量的に少ない古墳時代以降の遺物によって構成されていることを特徴とする土器溜りで、土器群としては最も新しいものである。したがって、出土遺物も多彩で、壺などの上師器類のほかに、蓋環などの須恵器類、土製支脚などの上製品、手捏土器が出土している。

出土遺物としては、壺（15-1）は、比較的小さな壺で、体部外面には粗いハケメによる調整を施している。高环（15-2）は、脚部を欠いているが、緩やかに内窵しながら口縁端部にいたる内、外面を赤色塗装した环部をもつものである。手捏土器（15-3）は、口径8cm、器高4cmの浅いもので、体部は、中央に膨らみをもたせ、やや内窵しながら立ち上がる。器表には川凸があり、口縁も波打つ



第14図 土器群2実測図



第15図 土器群2出土遺物実測図

ている。竈（15-4、5）は、底部と底部で、土製支脚（15-6）とともに、集落があったことをはっきりと示す遺物である。当該期の集落は、今回の調査では検出できなかったが、この周辺にあることを示唆している。須恵器（15-7、8）は、壊蓋と蓋の一部である。小形壺（15-9）は、口縁端部を内側に肥厚させたタイプの造構である。

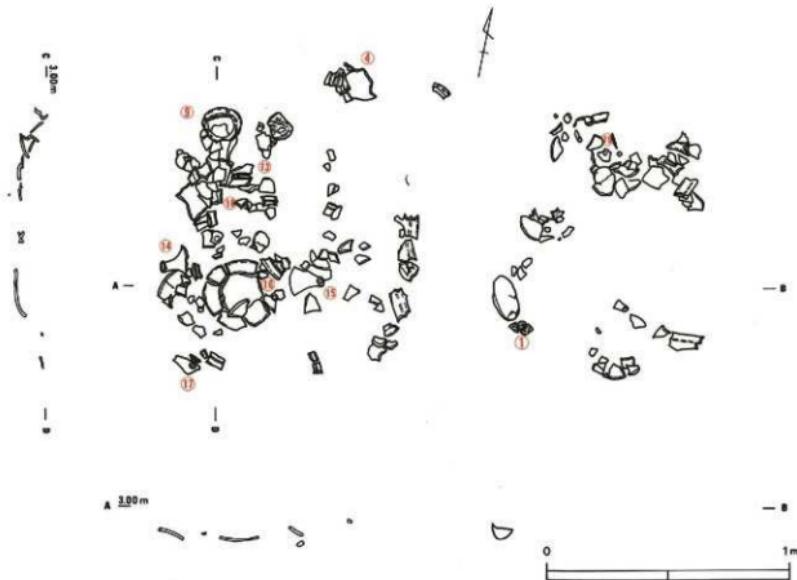
### 土器群3（第16図、第17図、第18図）

調査区での中央北側、A 3 グリッドで確認した土器溜りで、土器群上面のレベルは標高3 mである。土器がおおむね集中する地点が3カ所あり、そのうちの2カ所を土器群3としてまとめている。残りの1カ所は、A 3 グリッドの北端付近にあったが、調査区外に続いたため全体が不明で、土器群として取り扱っていない。上器群3を構成するのは、東と西の2カ所の土器溜りで、いづれも約1 m四方に散布し、そのうち西側に多いが、土器群の下層には、十坑などの遺構は認められなかった。

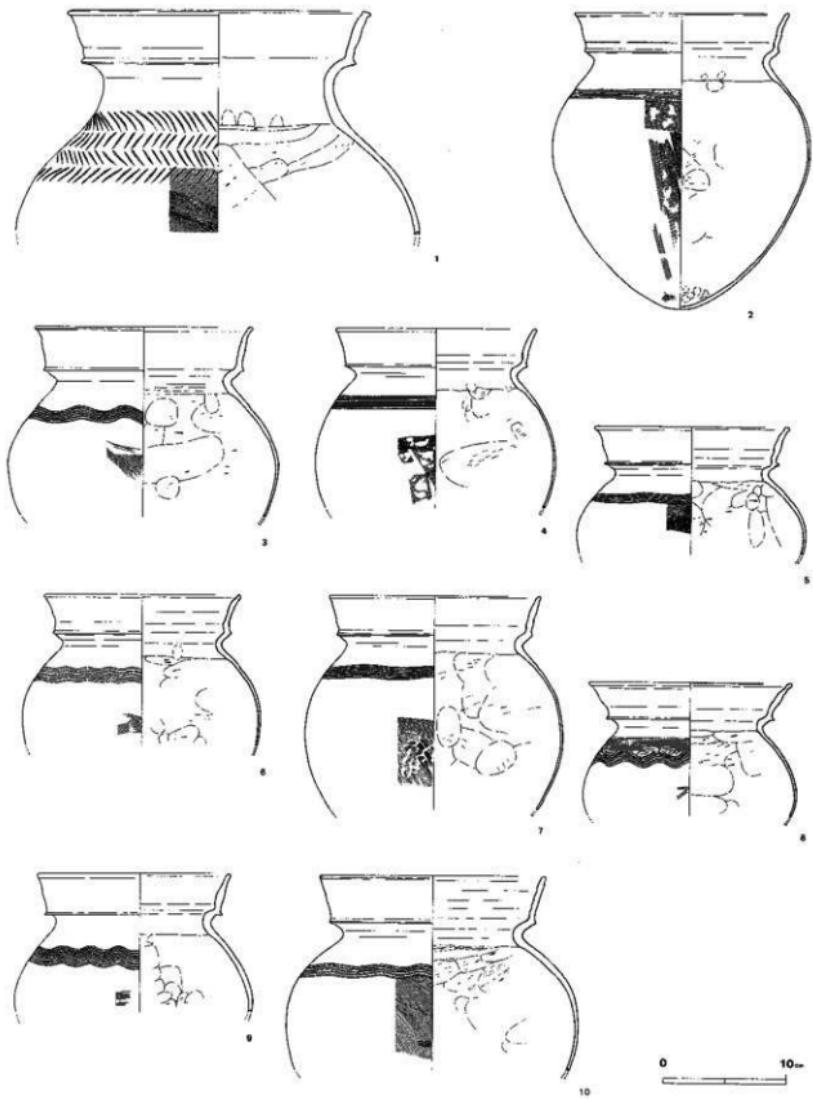
器種構成でみると、広口壺1、甕15、器台1、高环2、低脚环4からなり、甕の個体数が多いことは、他の上器群と同じだが、器台、低脚环、高环の、全体における比率が高く、特に低脚环が多いことが特徴といえる。

出土遺物では、広口壺（17-1）は1点ある。口径25 cm、器高40 cm（推定）の大形品で、体部下半を欠失している。複合口縁の稜は横に突出し、やや外に開きながら立ち上がっている。口縁端部はやや外側に傾くが、平坦面をなしている。体部外面の肩部には綾杉文、内面には、頸部附近に指頭圧痕、それ以下にケズリを施している。甕は土器の中で最も個体数が多く、甕（17-2）は、やや倒卵形の

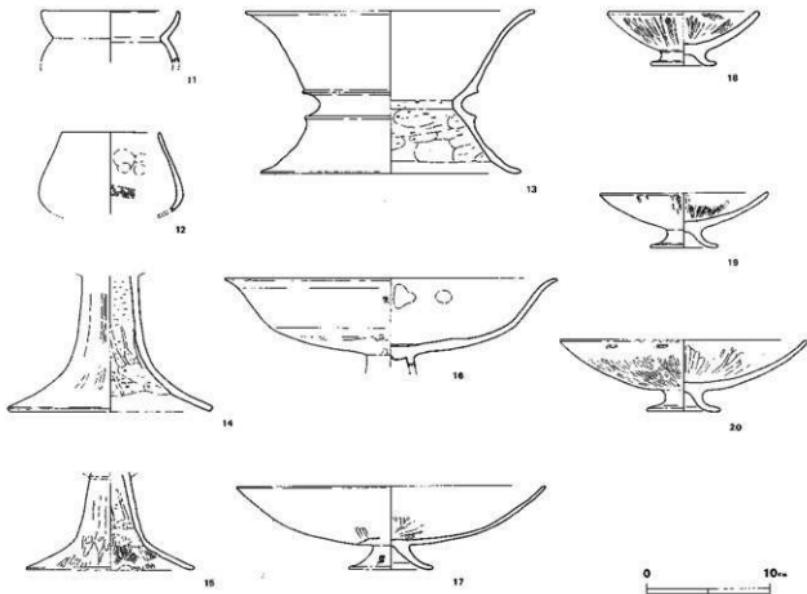
器形をなし、口縁部は器肉が薄く、外に開いて立ち上がり、体部外面に平行沈線、ハケメ、内面の頸部以下にケズリを施し、頸部と底部には指頭圧痕が認められる。なお、底部には、かすかな平底の痕跡を残している。甕(17-3~10)は、形態や調整がほぼ同じで、口縁の立ち上がりが外側へ開き、薄く引き出すような形態が多く、体部外面は、波状文や平行線文、列点文で飾り、内面は頸部以下に比較的大きなケズリを施している。甕のほかでは、他地域からの搬入系遺物と考えられるものが2点ある。小形壺(18-11)と考えられるものは、口縁部のみで全体の器形は不明だが、口縁は内弯し、端部は細く引き出すもので、胎土が赤っぽく、在地の土器とは明らかに異なっている。また、脚付壺(8-12)と考えられる土器は、下半を欠いているが、体部が内弯する独特のプロポーションで、外面に綺麗なミガキを入れ、内面には指頭圧痕の残る、焼きの良い土器である。器台(18-13)は鼓形器台で、下台にくらべて上台がやや高いのが特徴で、端部はいづれも大きく開いている。内面は、ヘラミガキの上台とケズリのある下台の間が縮約したものである。高坏(18-14、15)は、いづれも坏部を欠いているが、長い筒状の脚をもち、底部付近で大きく外側へ開脚する。外面にはタテ方向の幅の狭いミガキが丁寧に施され、内面には、ケズリも部分的に入っている。高坏(18-16)は、形態的に



第16図 土器群3実測図



第17図 土器群3出土遺物実測図(1)



第18図 土器群3出土遺物実測図(2)

は、高坏(18-14)の坏部で、体部中央でかすかな段差はあるものの、緩やかに外反し、端部で急に外側に開いている。口径27cmの大形のもので、内外面にミガキを施し、脚部との接合には、円盤を充填している。また、内面には、指頭圧痕による成形もみられる。低脚坏の数が多いことは、上器群3の特徴ともなっているが、図示した4個体は、形態的に異なり、この時期の低脚坏の多様性を示すものといえ、それぞれの機能が分化していることを窺わせる。低脚坏(18-17)は、その中でも最も口径が大きいもので、25cmを測る。これは、高坏(18-16)とほぼ同じであり、低脚部にくらべて極端に坏部が大きく開いている。内外面ともミガキを施している優品である。低脚坏(18-18)は、この中では最も小さく、口径12cm、器高4.5cmの小形品である。器肉がかなり厚く、内外面に入念なミガキを施しており、4個体の中では、時期的に最も占い要素を備えているといえる。低脚坏(18-19)は、18をひと回り大きくした低脚坏であるが、口径に比して高さもやや低く、器肉も薄い。ミガキも18とくらべれば、かなり粗雑で、この4個体の中では、最も新しい要素を備えている。

土器群3を構成する上器は、甕の端部の形態などからみて、おおむね山持川川岸3期に含まれるものと考えられる。

#### 土器群4（第19図、第20図、第21図）

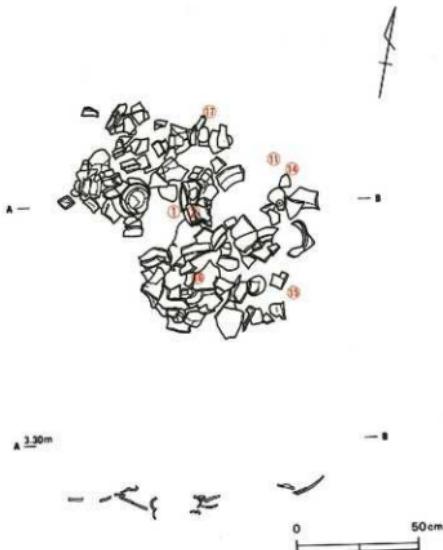
上器群3の東、A4グリッドで確認した土器溜りである。土器は、およそ1m四方にまとまってい

たが、今回の調査で検出した土器溜りの中では、最も個体数が多く、知り得る限りでは、43個体を数える。そのうちでは、壺が圧倒的に多く、35個体で、次いで低脚壺4、器台3、広口壺1の器種構成となっており、高环が1個体も含まれていない点が特徴といえる。この土器群の下にはSK04が存在しているが、前述したように、土坑の上に土器群が伴うものは、SK01に多量の土器が伴出することと、土器群6にその可能性がある程度であり、土器群4がSK04とセットになるかどうかは微妙である。土器からみる限りでは、SK04と土器群4はほぼ同時期と考えられ、位置的にみてもSK04と一致しており、連続性からみても両者は同一の遺構であるとも考えられるが、断定するには至らない。

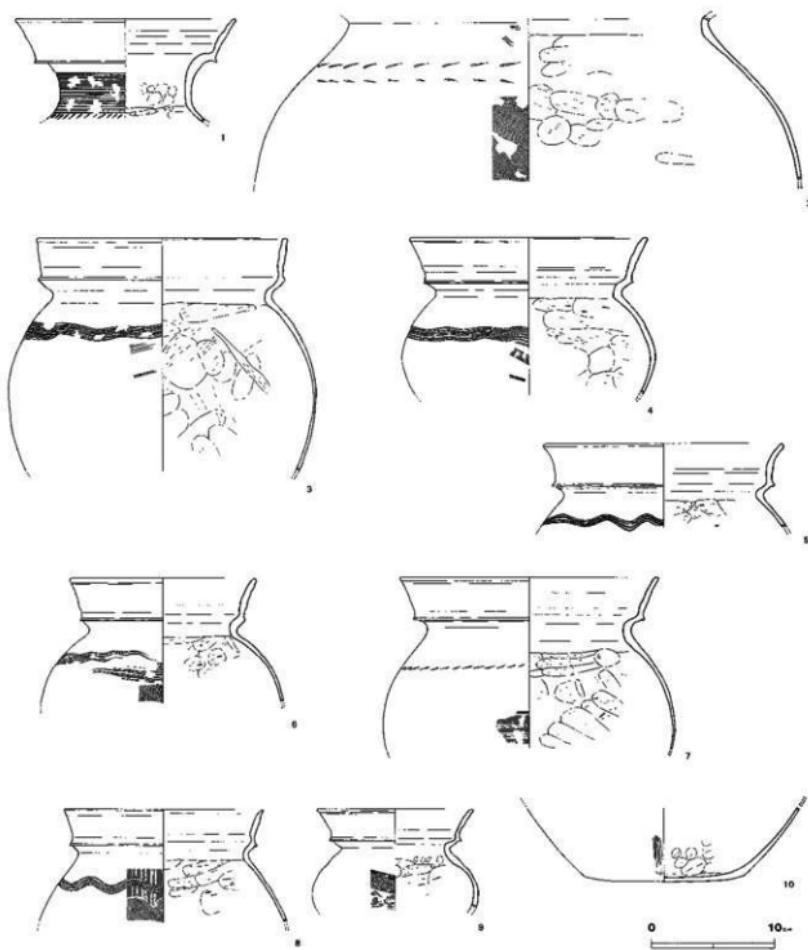
出土遺物では、広口壺(20-1)は、やや外反する口縁部をもち、立ち上がった頸部に平行線文を施す。内面には、頸部付近に指頭圧痕、その下はケズリ調整を行なっている。最も器種的に多いのは甕であるが、8、9にみられるような、口縁端部を外反させ、薄く引き出したような形態の甕が多い。体部外面は、波状文や列点文で飾り、内面頸部以下にケズリを施している。中には、2のような大形の甕や、10のように底部に広い平坦面をもつものも含まれている。甕のほか、器台(21-11、12)は、いづれも下台のみである。高環(21-13)は、脚部を欠くが、緩やかに内弯して口縁付近でやや外反する通有のものである。また、环部内面下半に指頭圧痕による調整がみられる。低脚环(21-14)は、土器群3の低脚环と形態的にやや異なり、环部がかなり内弯しながら口縁にいたるものである。低脚环(21-15)は、环部が大きく開くものであるが、口縁端部付近を欠き、全体の大きさは不明である。低脚环(21-16)は、今回の調査では量的には少ない形態で、环としてはやや深く、低脚塊ともいえるものである。深い环部は、口縁がやや外反し、环部の内外面にタテ方向のミガキがある。低脚部は通有の低脚环よりも開かずに、やや急に立ち上っており、内面にはケズリを施す特徴がある。

注口部(21-17)は、今回の調査で数点出土しているが、欠損して体部から離れているため、全形は窺い知ることができない。

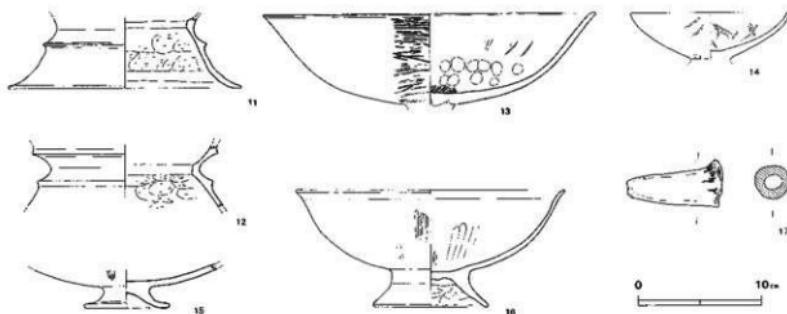
これらの土器は、口縁端部が平坦な甕も少し含まれ、時期的に幅があるものの、おむね山持川川岸3期を主体とするものとみることができる。



第19図 土器群4 實測図



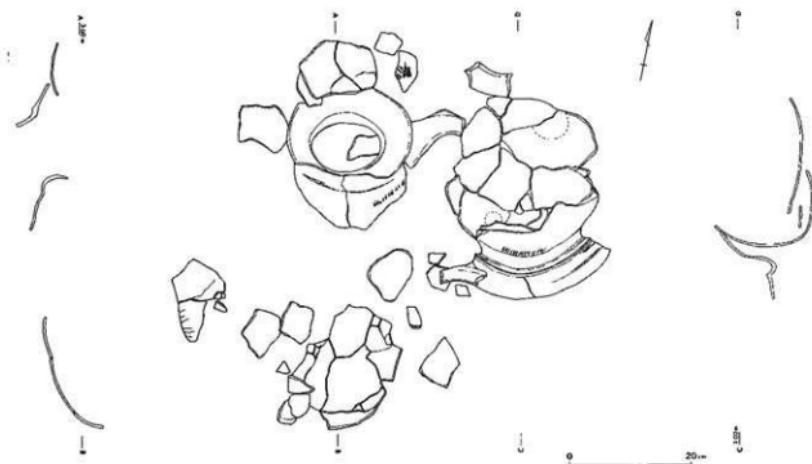
第20図 土器群4出土遺物実測図(1)



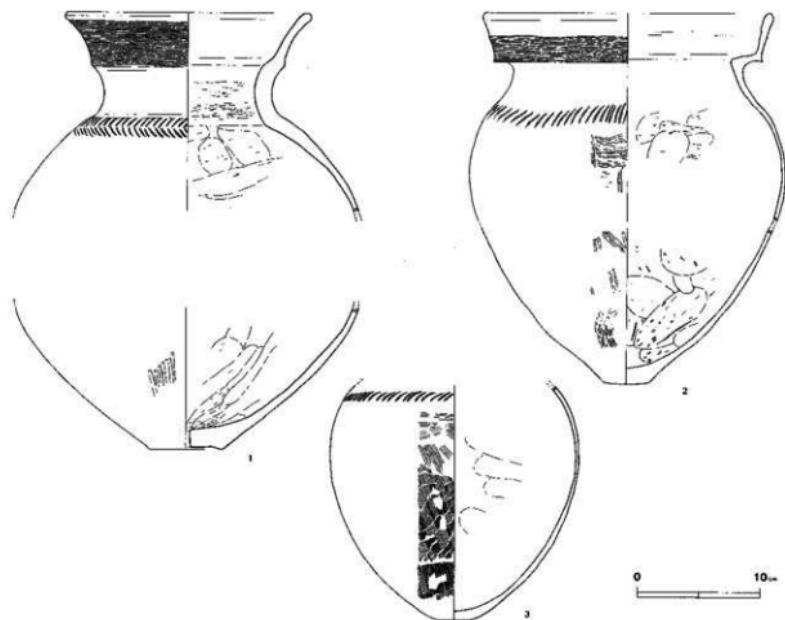
第21図 土器群4出土遺物実測図(2)

上器群5（第22図、第23図）

B5グリッドの暗灰褐色粘質土中で出土した土器群である。量的にはかなり少ないが、山持川川岸遺跡では古い部類に属する土器がまとまっていたので、土器群として扱っている。また、この土器群の特徴としては、上器が並べて置かれたようにして出土しており、うち1個体（広口壺）の底部には焼成前の小孔が穿たれている点である。今回の調査では、底部穿孔土器は、別に1点が出土しており祭祀にかかる遺物として注目される。広口壺（23-1）は、完形ではないが同一個体と考えられ、貝殻腹縁による擬凹線で飾った厚手の口縁をもつ。厚手の平底には、径0.6cmの焼成前の穿孔がある。壺（23-2）は、1と同じく口縁外面には、下半に貝殻腹縁による擬凹線を施し、倒卵形の体部肩部に列点文、それより下には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。今回の調査で出土した壺の外面に、ヘラ



第22図 土器群5実測図

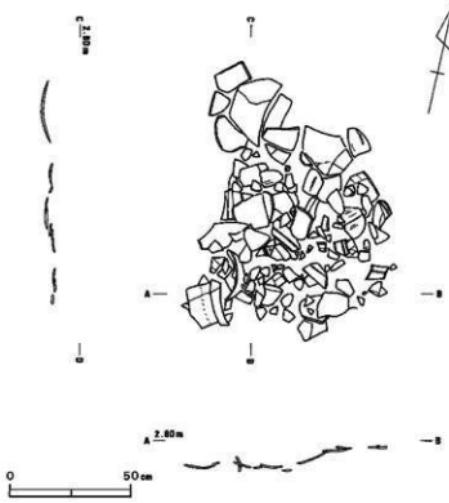


第23図 土器群5出土遺物実測図

ミガキを施すものは類例がない。壺(23-3)は、口縁部を欠くが、体部の膨らみに特色がある平底の土器で、今回の調査では類例がない。なお、この土器群のすぐ北側の下層レベルからは、弥生時代中期後半の広口壺(36-1)も出土している。

これらの土器は、土器群としては、今回の調査において、最も古い時期のもので、山持川川岸1期に属する。

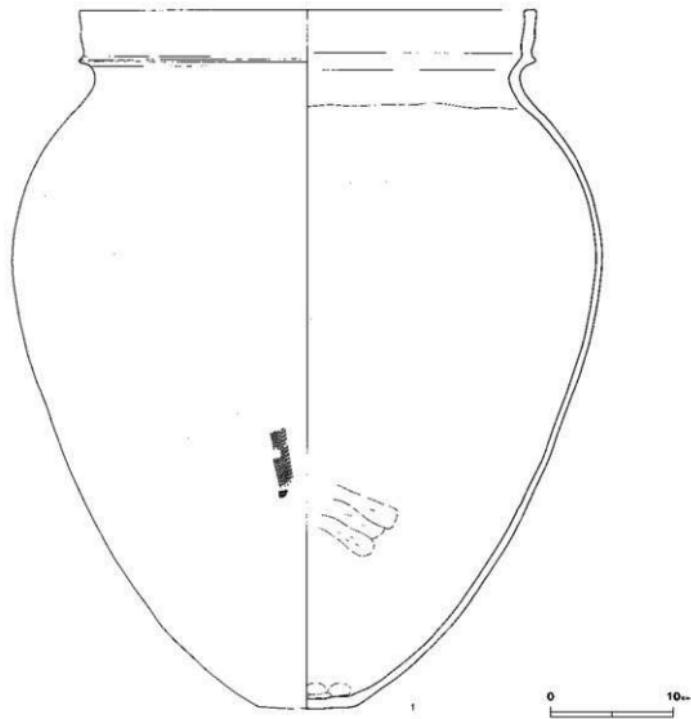
土器群6(第24図、第25図、第26図)  
B5グリッドで確認した上器群で、上器群5の東方2mに、0.8×1.2mの範囲に土器が集中している。器種構成は、知り得る限りでは、壺6、器台2で、広口壺、高壺、低脚壺は含まれていない。



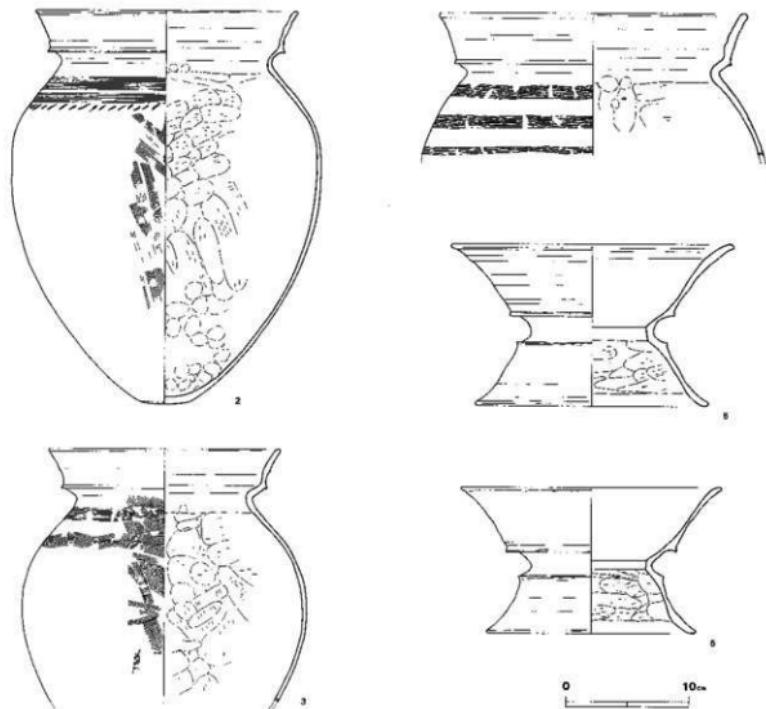
第24図 土器群6実測図

標高約2.8mを上面とし、上器が集中する範囲に、土坑らしき落ち込みのプランを検出したが、極めて薄く、その可能性については、断定するまでには至らない。土器群を構成する土器の中に、1個体だけ壺の大形品があり、土器群の北側最上面で出土している。やや大きな碎片として散布していたが復元すると1個体になり、口径37cm、器高57cmの平底の大形の壺で、これは今回の調査で出土した土器の中では最大のものである。

壺(25-1)は、口縁がほぼ垂直に立ち上がるるもので、やや厚い器肉の短い口縁の端部は平坦面をなしている。頸部は短かく、体部は倒卵形を呈する。底部は平底であるが、器肉は厚くはない。外面は磨耗により剥離し、調整はほとんどわからないが、一部にハケメが残っている。内面もほとんど調整はわからないが、ケズリや底部付近に指頭圧痕がある。壺(26-2)は、器肉の薄い上器で、外側に開いた口縁をもっている。体部は倒卵形をなし、底部は微かな平底である。外面肩部は、2列の平行線文の下に列点文を配し、その下はハケメ調整を行っている。内面の頸部以下には、上はヨコ方向、その下は、下から上へのケズリを施している。底部からその上10cmの間には多くの指頭圧痕がみられ、



第25図 土器群6出土遺物実測図(1)



第26図 土器群6出土遺物実測図(2)

頸部にも一部残っている。壺(26-3)は、体部下半を欠いてはいるが、プロポーションは2とほぼ同じで、やや小さい上器である。壺(26-4)は、2、3とくらべると、口縁の器肉がやや厚い。外面肩部には、1.5cm間隔で3列の平行線文を配している。内面には、頸部に指頭圧痕がみられ、その下はケズリを施している。器台は2個体出土しており、いづれも1個体として復元できたものである。形態的にはほぼ同じであるが、5がやや大きい。

壺の形態からみて、おおむね山持川岸3期に含まれると考えられる。

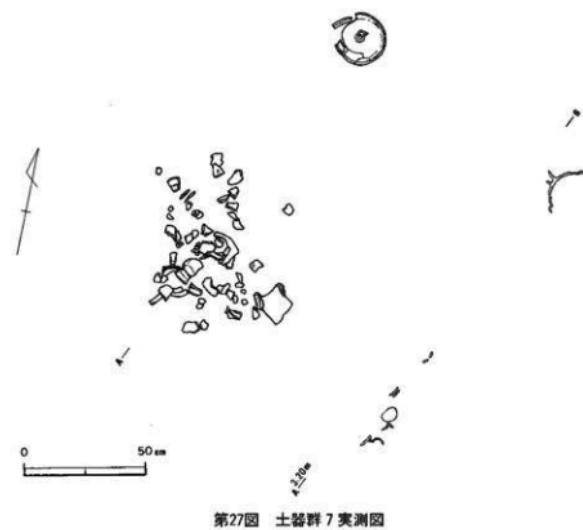
#### 土器群7 (第27図、第28図)

C5グリッドの南西隅付近で確認した土器群であるが、量的にはそう多くはない。0.7×0.9 mの範囲にまとまっているほか、やや離れて1個体がある。器種構成は、広口壺1、壺8、高壺3、低胸壺2、器台1で、量がそう多くない剖には、多くの器種が揃っている。

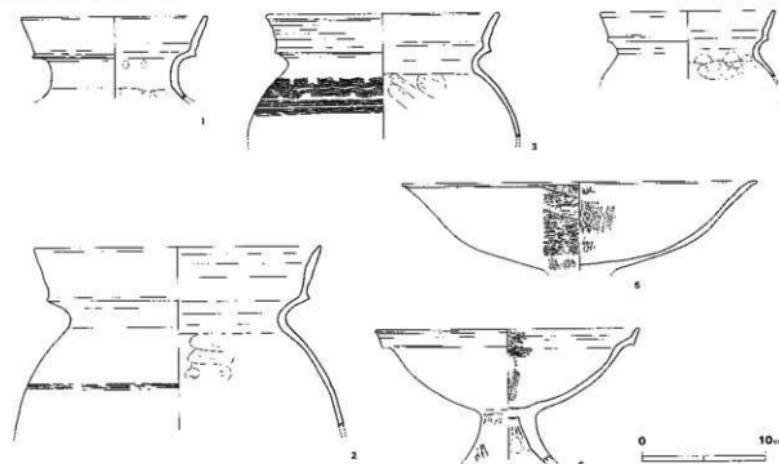
広口壺(28-1)は、立ち上がった頸部に、やや外側へ直線的に広がる複合口縁をもち、複合部の稜はやや下に突出する。体部を欠いているが、頸部内面には指頭圧痕が残り、その下はケズリを施している。壺は量的に最も多いが、壺(28-2)は、やや外側に直線的に開く口縁をもち、複合部の稜

は、あまり突出しない。口縁内面では、中ほどで屈曲し、稜をなしている。甕(28-3)は、2よりも口縁が外反し内面では稜をなして屈曲する。複合部の稜も下方にやや突出する。口縁端部も丸い。高坏(28-5)は、脚部を欠き、坏部のみであるが、脚部との接合部から緩やかに広がり外反する通常のタイプで、端部寄りの中ほどにやや段差がある。器肉は薄いが焼成は良好で、内外面に細かく丁寧なミガキを施している。高坏(28-6)は、5より時期的には古い時期の遺物であり、上器群の中でも位置的に少し離れており、本来土器群には含まれない可能性のあるものである。

土器群を構成する遺物のうち、6を除けば、上器群6よりは時期的にやや古い要素があり、甕の口縁端部、複合部の稜の特徴などからみて、山持川川岸2期に含まれると考えられる。



第27図 土器群7実測図



第28図 土器群7出土遺物実測図

上器群8 (第29図、第30図)

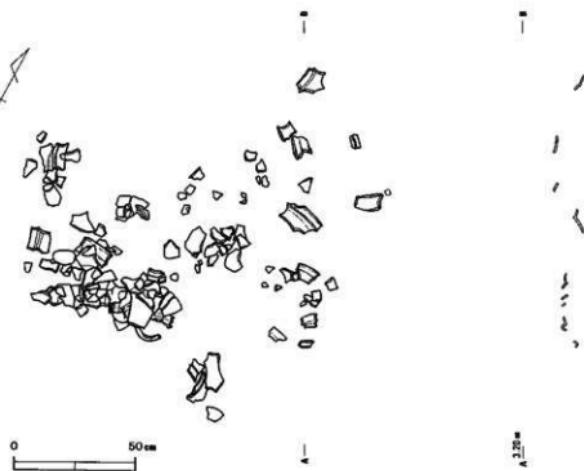
C5グリッドで確認した土器群で、土器群7の2m東側に 1.5×1.5 mの範囲でまとまっていた上器群である。器種構成は、壺が圧倒的に多く14個体で、他には広口壺1、高壺1、低脚壺1となっている。土器群の上面の標高は、3.1mで、主に西側に密に散布している。

広口壺(30-1)は、かなり焼きの良い土器で、複合口縁が内傾する特徴をもち、今回の調査でも、この形態の広口壺がいくつか出土している。口縁端部は平坦であるが、やや内側に傾いている。体部下半を欠いているが、外面肩部には、平行線文や列点文を施している。内面頸部には、指頭圧痕が2段に残っており、それ以下はケズリが施されている。壺(30-2)は、やや外反する口縁の外面に、細かな波状文を描いている。端部が丸く、複合口縁部の稜はやや下方に突出する。壺(30-3、4、5)は、4、5が2とほぼ

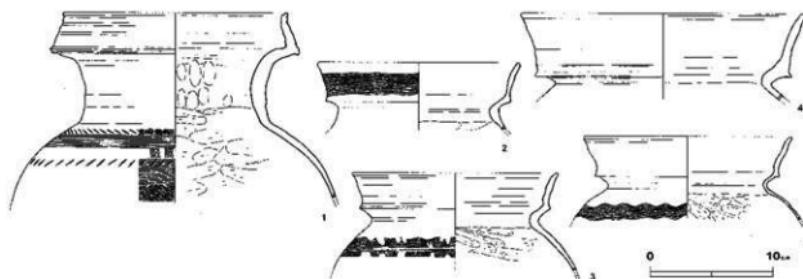
同形態の特徴をもつ土

器であるが、3の複合  
口縁部の稜は、ややヨ  
コ方向に突出している。

これらの土器は、や  
や新しい要素をもつも  
のもあるが、土器群7  
とほぼ同じ特徴をもつ  
土器であり、山持川川  
岸2期を主体とするも  
のといえる。



第29図 土器群8 実測図

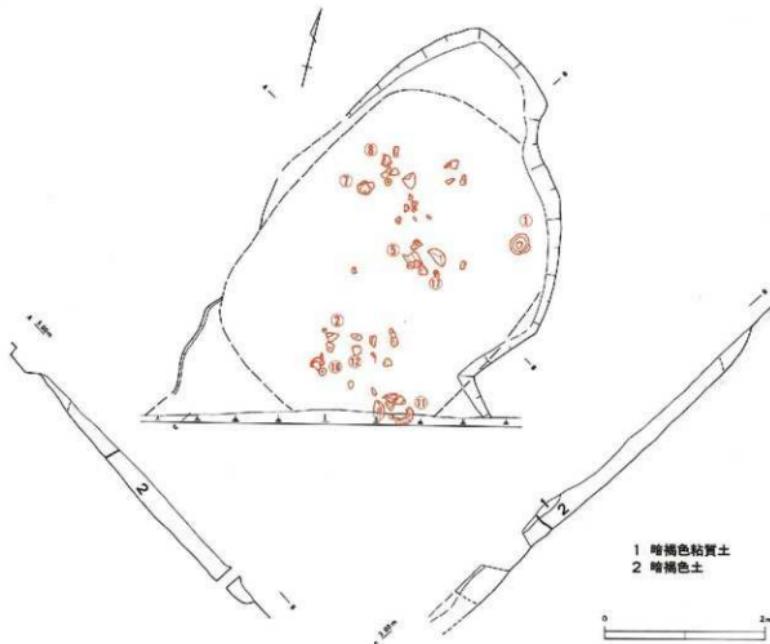


第30図 土器群8 出土遺物実測図

S I O 1 (第31図、第32図、第33図)

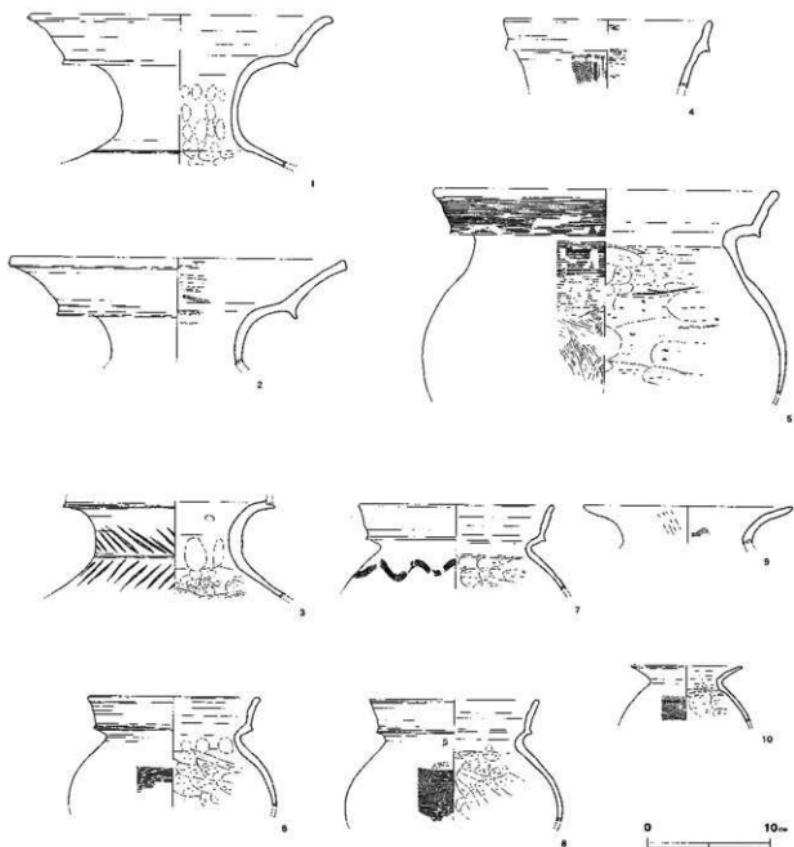
C 3 グリッドから検出された遺構で、一部は C 2 、南端は調査区外に伸びる。今回の調査で検出された唯一の竪穴住居であるが、上面でのプラン検出はある程度可能であったが、床面を砂層にまで掘り込んでいるため地下水の湧出が多く、掘り終えた段階で形がかなり崩れている。規模は、 $4.4 \times 3.2$  mで、平面プランは隅丸長方形である。確認し得た限りでは、遺構の深さは約20cmしかなく、本来はもう少しあったと考えられる。この住居内覆土には、セクションでみると、幅15cmの大きなものから、1~2cmの小さなものまで、数条の噴砂の砂脈が確認される。竪穴住居からの出土遺物の器種構成をみると、甕4、広口壺4、高环3、器台3、蓋1となっており、相対的に甕の占める比率が小さいのが特徴といえる。また、竪穴住居の上層には、須恵器、土製支脚、竈などの古墳時代以降の遺物が出土している土器群2が認められたほか、C 2とともに、比較的多くの遺物が出土している。

広口壺には二種類あり、広口壺(32-1, 2)は、大きく外反する口縁と、細くすぼまった頸部が特色で、口縁端部はやや丸味のあるものと、やや平坦なものがある。1は内面頸部に指頭圧痕が明瞭に残っており、それより下はケズリを施している。広口壺(32-3)は、やや頸部が太くガッシリしたタイプのもので、口縁部は欠いているが、外面の頸部から肩部にかけて、列点文を羽状に配している。内面には、頸部に指頭圧痕、頸部以下にケズリを施している。壺(32-4)は類例の少ない土器で、

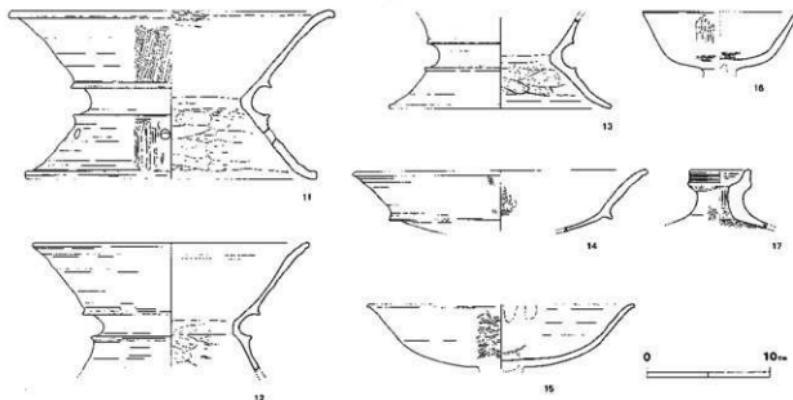


第31図 S I O 1 実測図

山持川川岸遺跡では他にないが、鹿島町の草田遺跡から同形態でやや小さいものが出土している。甕(32-5)は、混入した土器で、堅穴住居よりも古い時期の土器である。口縁は、貝殻腹縁による擬凹線文で飾られ、体部は下半を欠いているが、外面の中ほどから下には、タテ方向の細かなミガキがみられる。内面は、頸部の下にケズリをいれている。甕(32-6)は、口縁端部が丸く、複合部の稜は、ヨコ方向に突出しているが、内面には中ほどに稜があり、外側に屈曲している。体部は下半を欠いているが、外面にはハケメを施し、内面には頸部に指頭圧痕、それ以下にケズリを入れている。甕(32-7)は、口縁端部が丸く、体部は振幅の大きな波状文で飾り、内面には頸部以下にケズリを入れている。甕(32-8)は、6、7とほぼ同じ形態の甕で、体部がかなり膨らみ、やや器高の低いタイプの甕と考えられる。単純口縁の甕(32-9、10)は、胎上が在地の土器と異なり、他地域から搬入された



第32図 S101出土遺物実測図(1)



第33図 S101出土遺物実測図(2)

と考えられるものである。器台(33-11)は、今回の調査で出土した器台の中でも、最も焼きの良い優品である。上台の口径27cm、下台の口径24cm、器高14cmの人形品である。この器台が、今回の調査で出土した他の器台と異なる点は2点ある。1点は、上台、下台とも、全体的にタテ方向の幅の狭いミガキ調整がなされている点である。こうした器台は類例が少ないが、鹿島町の草川遺跡でも出土している。もう1点は、下台の四方に、等間隔で、径1cmの小孔が貫通していることである。鹿島町の草川遺跡では、2個1対のものが出土している。器台(33-12)は、11よりやや小さいが、下台の下半を欠いている。器台(33-13)は、11、12とくらべると、かなり小形品である。上台と下台の間が縮約され、上台の端部付近を欠いている。図示した高環は3点あるが、それぞれ環部の形態がかなり異なっている。そのうち15は、この時期に通有のものである。高環(33-14)は、脚部と環部の底部付近を欠いている。環部の中ほどに、壺や盤にみられる複合口縁の稜があり、下方に鋭く突出している。

口縁は、そこから緩やかに外反し、端部はやや平坦になっている。調整は、内外面とも細かなミガキを施している。稜から底部にかけては、やや内湾しながら脚部と接合するものと考えられる。高環(33-15)は、脚部を欠いているが、緩やかなカーブを描いて外側に大きく開く環部は、中ほどでやや畳曲している。内面は、端部から3cm下に微かな屈曲がある。調整は、外面にヨコ方向の細かなミガキ、内面にも細かなミガキのほか、口縁内側に、成形段階の指頭圧痕が残っている。なお、脚柱部との接合は、円盤を充填している。高環(33-16)は、環部のみで、口径13cmの小形品である。山持川川岸遺跡では、類例がないもので、内外面にミガキ調整をしている。蓋(33-17)は、今回の調査で数点出土しているものの一つで、時期的には、竪穴住居には属さない混入品と考えられる。

これらの出土遺物からみると、この竪穴住居の時期は、おおむね山持川川岸4期と考えられる。

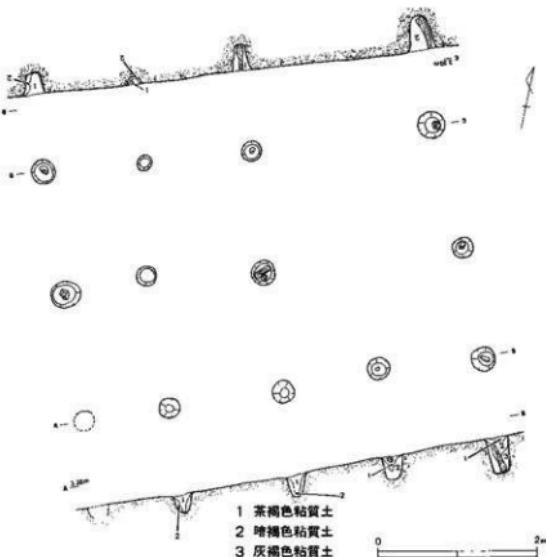
### S B 01 (第34図、第35図)

調査区の北西部分で検出した掘立柱建物である。平面プランでみると、柱穴は東西方向に3列、南北方向に5列が認められるので、 $2 \times 4$ 間の東西に長い建物であったことが推定される。総柱のようであるが、南北方向のうち右から2列目の2本の柱穴が検出できなかった。柱穴は、1.2~1.6m間隔で配置され、そのうち7穴からは、柱根を確認している。柱穴の大きさは、径0.2~0.4m、深さは、0.1~0.45mで最も外側の柱穴が深い。柱穴内の土層からみると、上層に茶褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土がみられ、1穴のみ最下層から灰褐色粘質土があることから、この掘立柱建物の時期は、暗褐色粘質土の堆積した時期とみることができる。

出土遺物は少なく、すべて柱穴内から出土した土器である。器種がわかるものでは、広口壺1、甕3、器台1でいづれも小片で

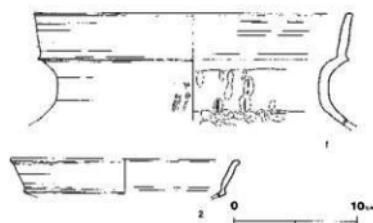
ある。広口壺(35-1)は、やや大形の土器で、体部を欠いているが、口縁はほぼ垂直に立ち上がり、端部は平坦面をなす。複合部の稜は、ほぼ横に鋭く突出する。調整としては、外面上にハケメ、内面頸部に指頭圧痕、それ以下は細かなケズリを施している。甕(35-2)は、口縁部のみの破片で、やや外側に開いて立ち上がり、端部がやや丸く、外側へ張り出すものである。

これらの土器の特徴からみて、山持川川岸4期に含まれると考えられるが、土器群1が、上層的にはこの掘立柱建



第34図 SB 01 実測図

物が建てられた暗褐色粘質土よりも、一時期後の暗灰褐色粘質土に包含され、今回の調査では造構としては唯一、古墳時代前期初頭に位置づけられることから、掘立柱建物の柱穴から出土した少量の出土遺物が、この造構に伴わないものであれば、この掘立柱建物あるいは、山持川川岸5期の可能性もある。



第35図 SB 01 出土遺物実測図

## 遺構に伴わないその他の出土遺物

今回の調査によって、遺構に伴わない、包含層からの出土遺物はかなり多い。そのほとんどは、弥生時代後葉の土器であるが、古い時期では、弥生時代中期後葉からの遺物が認められる。新しいものでは須恵器なども出土している。

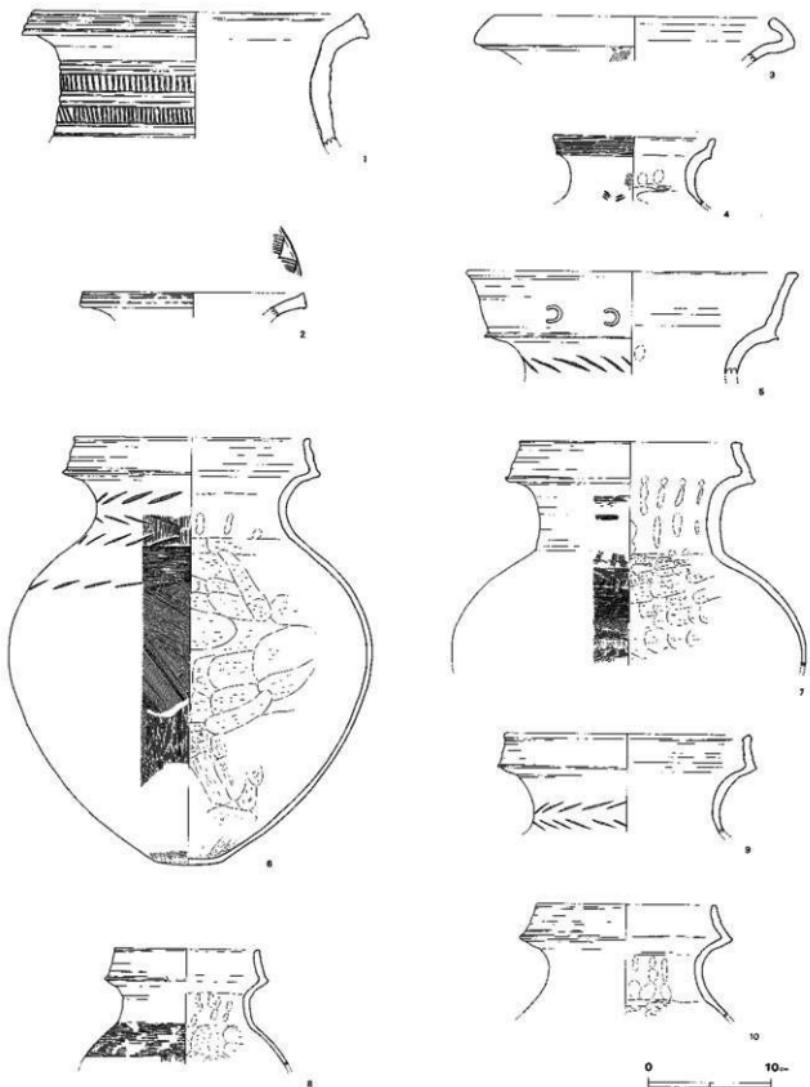
出土した土器のうち、特徴的な土器について、器種別に取り上げると、次のようになる。

広口壺には、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭のものまである。広口壺(36-1)は、口縁を回線文で飾るほか、頸部には凹線を引いたのちに、その間をタテに刻目を施している。2は、今回の調査で唯一、口唇部への施文があったものである。3は、九州から西瀬戸内系の袋状口縁で、胎土が在地の土器と異なる搬入品である。4は小形品であるが、この形態の壺は、今回の調査では他に例がない。5は、口縁外面に半截竹管文を施文している。6～10は、口縁が内傾するタイプの広口壺である。

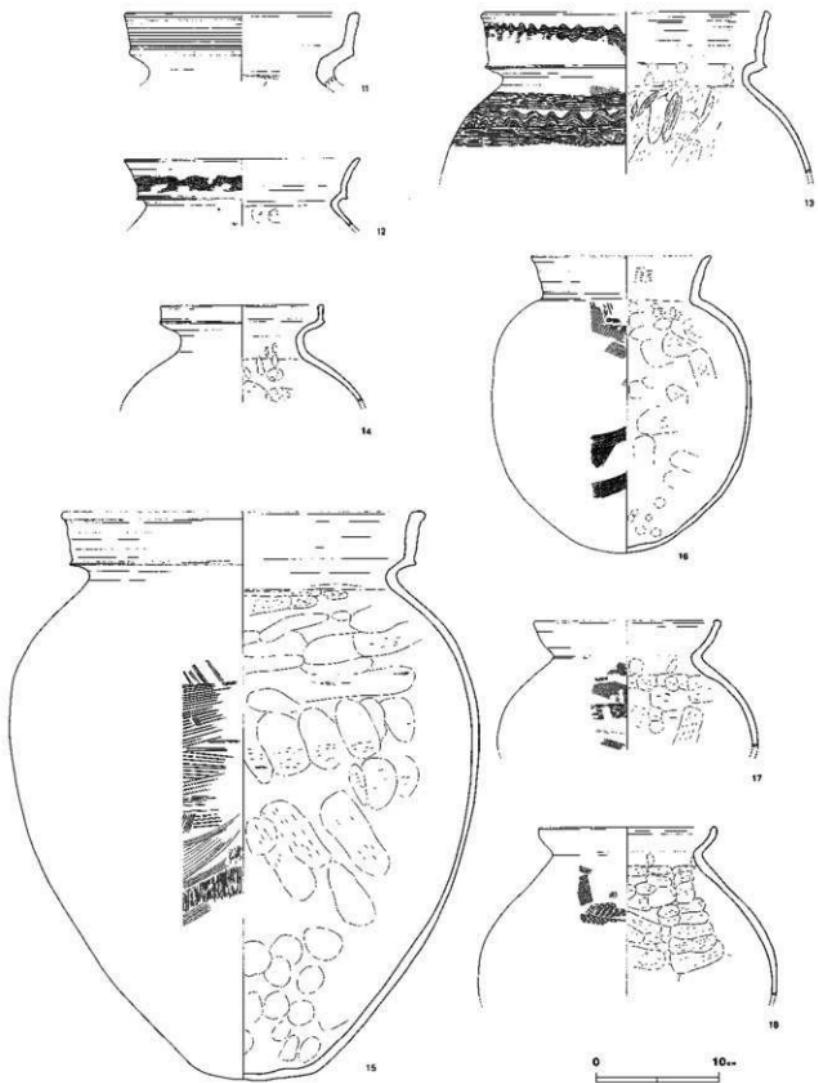
甕は、今回の調査で最も多く出土した器種である。口縁に擬凹線文を施文するものから、単純口縁のものまで、多種揃っている。甕(37-12、13)は、口縁外面に波状文を施文する、類例のそう多くはない上器である。14は、口縁が短く直立した上器で、端部はやや平坦である。15は大形の甕であるが、口縁部の器肉は厚く、端部は平坦面をなしている。内面には、指頭圧痕が大きく残っており、底部は平底である。16以降は古墳時代以降の土器で、16は、C 5-D 5のセクションベルト中の茶褐色粘質土から出土した中期の単純口縁の甕で、外側頸部下にタカキ様の凹みがある。体部は球形化し、底部は丸底である。内面頸部と底部付近に指頭圧痕が多くみられる。17は単純口縁の甕で、口縁は内湾気味に立ち上がり、端部を内側に肥厚させている。この形態の土器は、今回かなり出土している。18は、かなり口縁が短く内湾し、体部はかなり膨れた形状の甕で、類例が少ないものである。19は、口縁端部が内側に肥厚し、複合口縁の稜が退化したもので、精進されたやや縁っぽい胎土で、在地の上器とは異なる。20も口縁端部が内側に肥厚し、平坦面をなす甕で、胎土は粗い。21は、複合口縁の稜が突出しないで段差をなす土師器である。

22～27は小形丸底壺で、調整的には、外面にハケメ、内面に指頭圧痕やケズリを施しているが、胎土が在地の土器と異なるものもある。25は、胎土が在地の土器と異なるもので、体部中央でかなり急に屈曲する。27は、25と同じく、精進された胎土で、在地の土器よりもやや縁っぽい色調を呈し、肩部下でかなり鋭く屈曲する形態のものである。

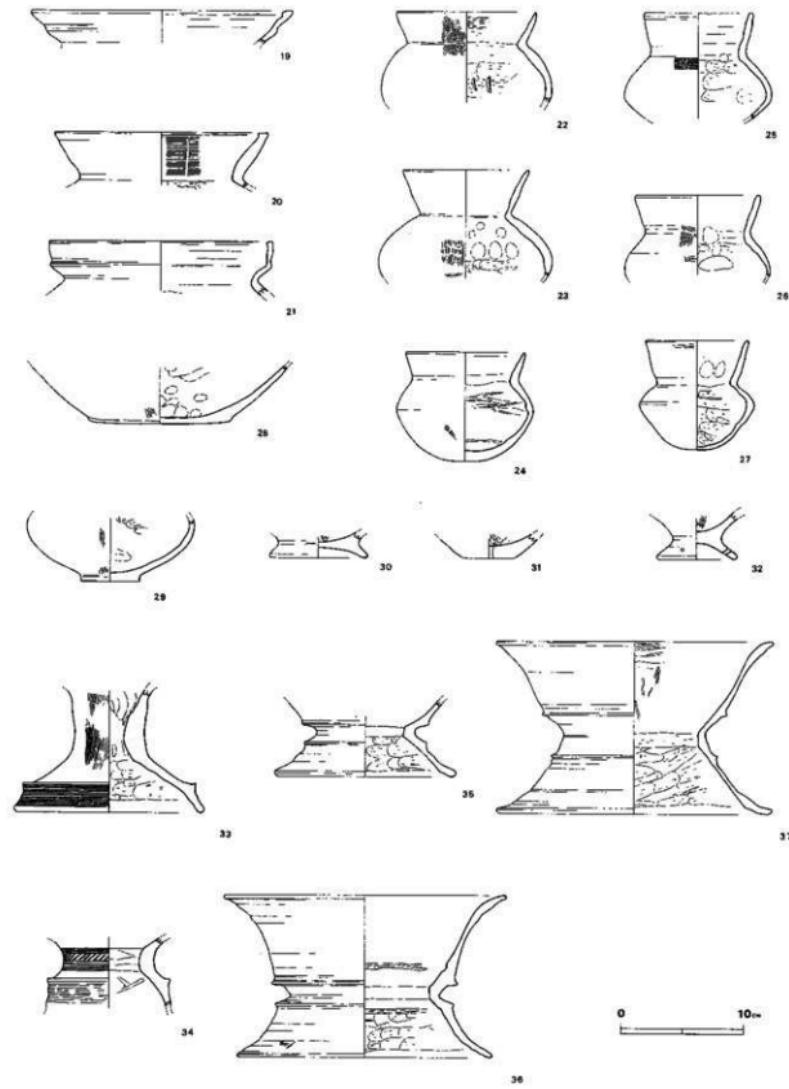
28～32は、特徴のある底部である。28は大きな平底で、外面にミガキがある。29は小形品だが、丁寧なつくりの土器である。30は、やや赤っぽい高台か上げ底で、搬入品の可能性がある。31は、両面からの焼成前の底部穿孔土器で、C 5-D 5セクションベルト中から出土しており、すぐ近くの土器群5からも、同様の広口壺が1個体出土している。32は、器種不明だが、高台状の底部に、径0.3cmの小孔が貫通している。



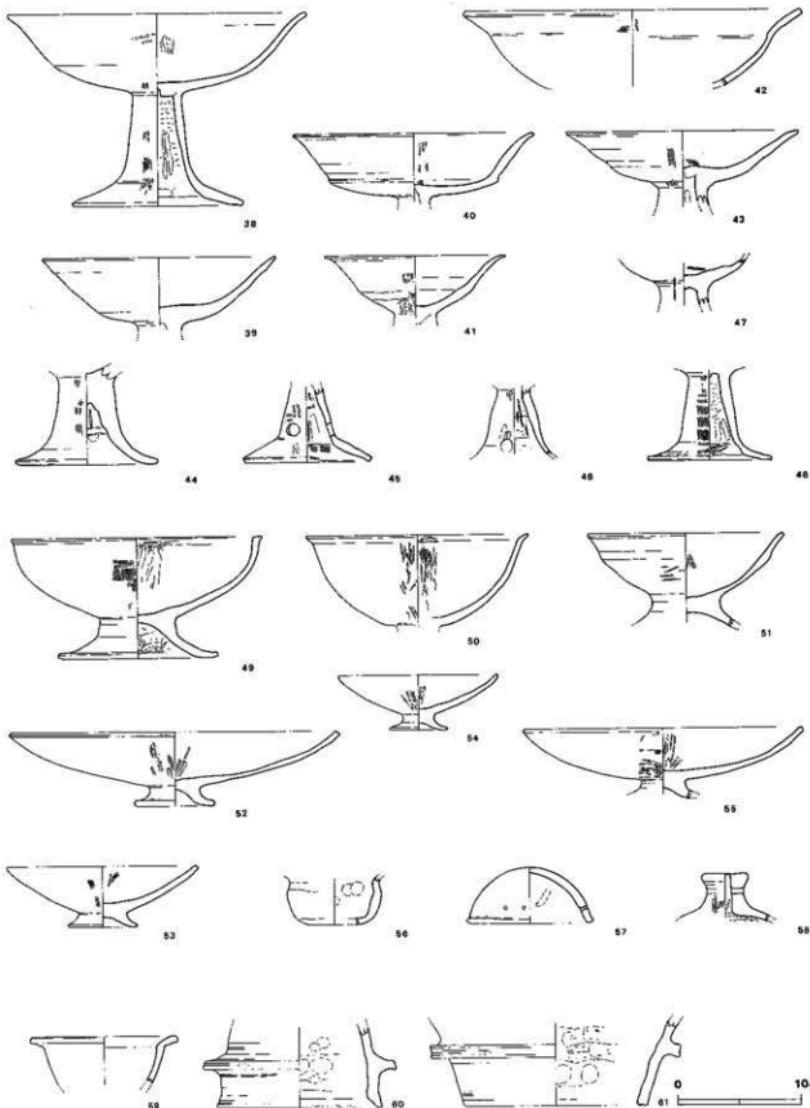
第36図 その他の出土遺物実測図(1)



第37図 その他の出土遺物実測図(2)



第38図 その他の出土遺物実測図(3)



第39図 その他の出土遺物実測図(4)

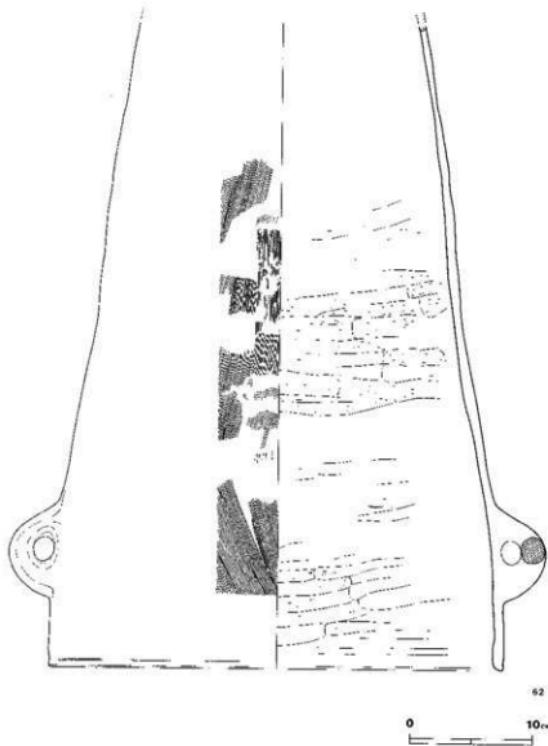
33~37は器台である。33は、端部を擬凹線文で飾った筒部の長いもので、外面と内面の一部を赤色塗彩している山持川川岸1期以前の器台である。34は、筒部に列点文や平行線文を施した山持川川岸1期に属するものである。35~37は、鼓形器台で、36には、内面に、筒部と上台や下台との接合部にできる凹みが残っており、製作工程を知るうえで興味深い。

38~48は、各期の高坏であるが、完形品は38のみである。39~43は、弥生土器、上師器の坏部で、脚部を欠いている。44~48は脚部のみで、47は須恵器である。40は外面に赤色塗彩し、42にも、内外面にその痕跡がある。45と46は形態的によく似ているが胎土が異なり、45は他地域からの搬入系遺物で、46はそれを模倣したと考えられる上器である。いづれも、三方に透しを穿っている。

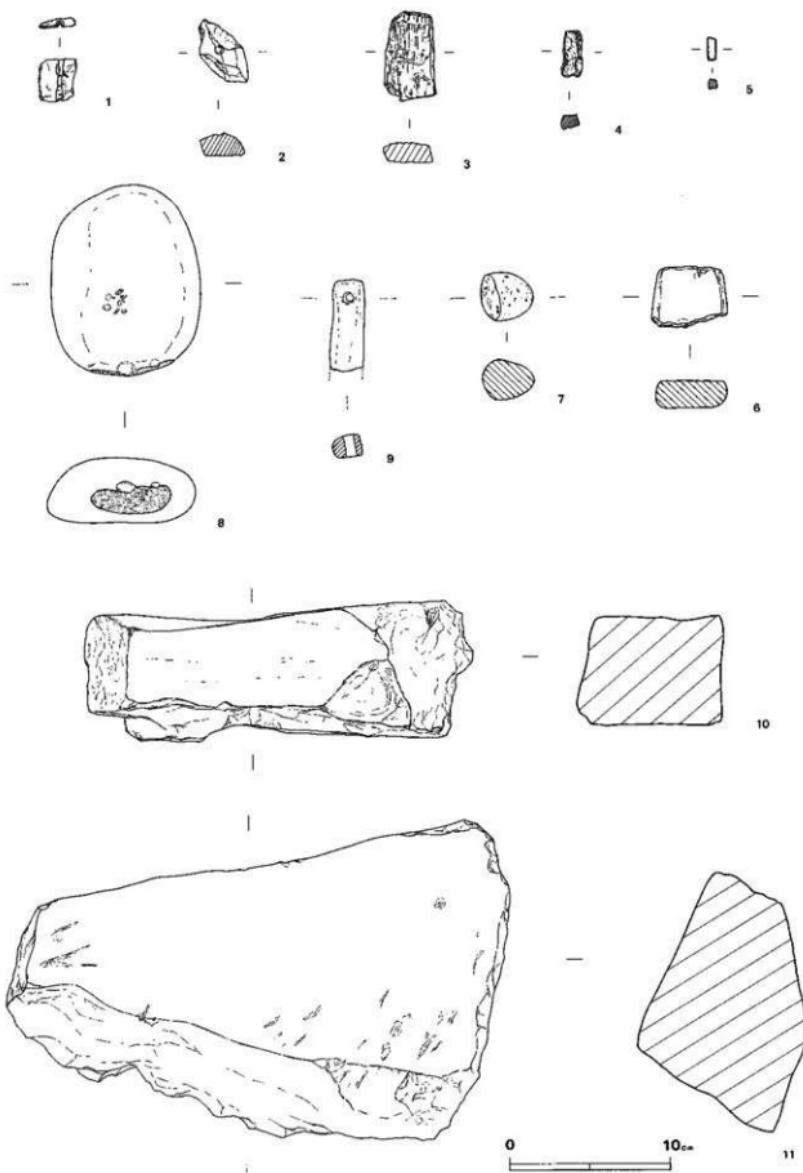
49~55は低脚坏である。坏部がやや深いものと浅いものの二つのタイプがある。57、58が弥生上器の蓋、60、61が甑形土器の一部である。62は調査区東側の排水用に掘った溝から山上した甑形土器で、器高50cm以上の大形品であるが、一部を欠損している。

#### 石製品・土製品

今回の調査で出土した遺物のほとんどは土器であるが、石製品、土製品も僅かながら出土している。第41図1~5は、玉関係遺物である。1は、グリーンタフで、上下両面は研磨され、両面からの穿孔が認められる。2は、グリーンタフ、3は珪化木である。4は、茶褐色粘質土から出土した碧玉製管玉未製品である。5は、グリーンタフと考えられる管玉未製品で、全面が綺麗に研磨されているが、穿孔はみられない。6、10、11は砥石である。6は小形品で、3面に砥面がある。10、11は大形品で、特に11は、第1土器群の傍らから出土している。7、8は磨石である。9は棒状土錘で、山陰地方での出土遺跡は数例しかないが、時期的には最も古いものである。



第40図 その他の出土遺物実測図(5)



第41図 石製品・土製品実測図

## 5. 山持川川岸遺跡の噴砂（液状化）について

鳥取大学 西田良平

### はじめに

平成7年1月17日の阪神・淡路人震災（兵庫県南地震）は家屋・ビルの倒壊、火災等によって多くの犠牲者を出し、沿岸部（埋め立て地）では地震波による液状化現象が発生し、地盤災害が港湾をはじめ隨所に見られた。被害地域で液状化現象による噴砂が見られることから、遺跡を発掘した時に液状化跡を発見することにより、過去の地震活動を知ることが出来ます。これは活断層を発掘調査して断層の活動歴を検出することにより、大地震発生を繰り返し調べることが行われていることと同じ意味を持つと考えられています。

地盤の液状化現象とは上に堆積平野で地表面下の地層が砂と泥の互層で地下水を含んでいる時、強い地震動により揺すられると砂層中の地下水の水圧が上昇し、砂が液体状になり、砂層の支持力がなくなり、地上にあるビルなどの重いものは沈み、地中に埋められている中空のマンホールなどが浮き上がり、地中の液状化した砂と水が表層地盤にできた割れ目に沿って上昇し、地表面に達すると、富士山のような噴砂丘を作り、大量の砂と水を噴き出す現象です。割れ目が地表面に達しなかった場合は、地表下の地層に板状に貯入した砂の脛（砂脈）を見ることが出来ます。遺跡で発掘される砂脈はこの様にして形成され、生成年代は砂の噴出した時の地表層の年代が判れば、発生年代が特定でき、液状化を発生させた地震を特定することが出来ます。

### 噴砂跡の状況

島根半島と中国山地に挟まれて、東から美保湾、弓ヶ浜半島、中海、大川、宍道湖、山雲平野と、



写真1 液状化による砂脈の分布

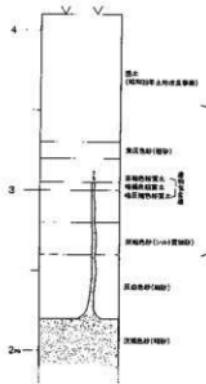


図1 砂脈の柱状圖  
(噴砂模式図)

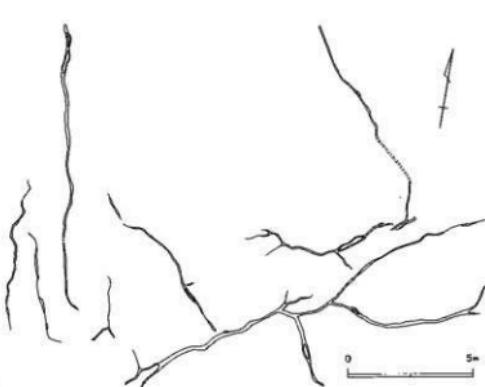


図2 砂脈の平面図 (噴砂平面図)

低地帯が続いている。特に、山芸平野は上砂の流出量が大きい斐伊川によって形成された沖積平野で、砂と砂礫の互層が発達し、その堆積量も大きく、地下水位も高く、地震波による液状化現象が発生しやすい条件の整っている地域であります。斐伊川のデルタ地帯で発見された山持川川岸遺跡での噴砂の状況は平面分布と垂直分布の両方で見ることができます。液状化する砂礫層は地表面下数mまでが発生しやすく、液状化した砂を含んだ泥水は上部層に出来た割れ目に沿って、または上部層に割れ目を無理矢理作って上昇します。地下の液状化された砂と水の被圧地下水圧が大きければ地表面に達します。この遺跡の液状化現象は、砂脈が地表面下約2mの淡褐色の砂層から上昇し、約1m上の粘土層の途中まで達していることが確認されています。しかし、上部層が土地改良工事で乱れているので、地表面に達したという証拠がないので、これ以上のことは確認できません。

水平分布では調査地全域に砂脈と言われる砂が液状化して噴出した跡が発掘されています。砂脈の方向はほぼ南北性(A走向)と東北東一西南西性(B走向)の2方向が見られる。A走向の砂脈は数が多いが、砂脈の幅は数cm以下と小さい。B走向の砂脈は10cm以上と大きく主な割れ目の方向と推定される。砂脈の走向は地震動の卓越した方向と地盤の割れ目の入り易さの方向などにより規制される。地震波の到来方向が推定できれば、この液状化を発生させた地震を特定する時に役に立つ。しかし、ここでは砂脈の入り方だけでは割れ目の走向がこの場所の特性か、地震動の到来方向によるものかを決めるることは出来ない。砂脈の幅が最大15cmにもなっているので、場所によってもっと上部層まで、あるいは、当時の地表面に達していたことと想定されるが、ここでも昭和39年の土地改良工事で上部層が保存されていないので判らない。左側の円形状の砂の塊は噴出丘ではなく、人工的なものと推定されています。

砂脈の入っている層は弥生中期から古墳時代に堆積された地層で、遺物が発掘された層である。しかし、この層までの砂脈は確認できるが、上部層の年代が確認されていないので、この砂脈が形成された時期は古墳時代の前期以降であるとは言えるが、年代を特定することが出来ない。

### 山陰地方の地震と出雲平野の液状化現象の発生

液状化を発生させる地震は近くに発生した大地震だけでなく、遠くの地震でも発生しています。今まで山陰地方で液状化を発生させた地震は記録に残っているだけで、安政南海地震（1854年、M8.4）、浜田地震（1872年、M7.1）、鳥取沖地震（1943年、M6.1）、鳥取地震（1943年、M7.2）などがあります。山雲平野では約100km離れた浜田地震で、多数の液状化による砂噴出が発生していたことが記録されています。そして、1946年に四国沖の太平洋海底に発生した巨人地震の南海地震（M8.0）によって、300km以上離れた出雲平野で倒壊家屋などの被害を出しています。これと同じ場所に発生した安政南海地震（1854年）では砂噴火が記録されています。このように遠い地震でも、出雲平野は地震波によって液状化現象が発生しています。1991年の島根県東部の地震（M5.9）は規模のやや小さい中地震ですが、松江市揖屋の中海十拓地の畠地で地割れが発生し、それに沿って地下約2mの海成の砂層から液状化した砂と水の噴出がありました。このように液状化の条件が合えば、中地震でも発生しています。液状化現象は山雲平野の地震動の強さ、震度に関係して発生しています。

島根県東部での遺跡から発見された液状化現象は、松江市原の前遺跡（島根県埋蔵文化財調査センター発掘調査）があります。ここでは、砂脈の垂直分布と杭の折れ曲がりが液状化の証拠です。下層の砂層から割れ目に沿って砂脈が上層の粘土層を貫いています。流動化した砂層は地表面から約2.5mの深さで、古墳時代前期の土師器が含まれていたことから4世紀以前の堆積層と推定される。砂脈が約50cmの暗褐色の粘土層を貫いて、粘土層の途中で扇状に広がっているが、実際の形状は10数cm幅の砂の帯だと推定されます。堆積年代を詳細に決めることが出来ないが、粘土層の上にある砂れき層

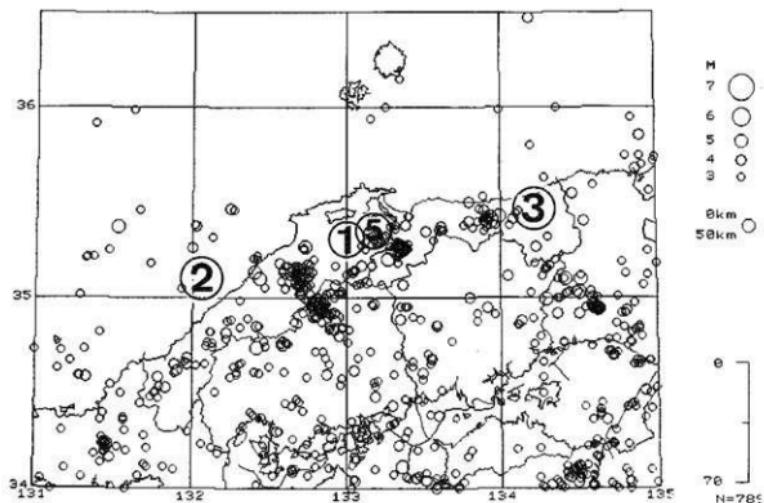


図3 地震活動分布図

気象庁によるマグニチュード3以上の地震（1960—1993年）（図中の番号は地震資料の地震を示す。）

で6世紀ごろの須恵器が出土していることから、液状化現象が発生したのは4世紀から6世紀の間と推定されています。

一方、山陰地方で記録に残っている1番古い地震は880年の山雲地震（M7.0）で、8世紀以前に地震が発生した記録は残っていない。山雲平野は表層構造から液状化の作用を受けやすい地域であるので、比較的遠方の大地震の浜田地震や、南海地震のように遠くに発生した巨大地震でも噴砂現象は起こっている。また、近くのM6クラスの中地震でも噴砂現象が発生している。液状化現象を発生させる震度5程度の地震動を与えた地震が、遠方の地震か、近くの地震か、どちらとも証拠がないので結論することは出来ない。しかし、最近の島根県東部の地震活動を解析していると、周期的にM5～6クラスの地震が発生している。約1500年前も、山陰地方の地震活動が活発な時期で、液状化を伴うような地震が発生したことは充分可能性がある。山持川川岸遺跡の液状化を発生させた地震と、原の前遺跡の液状化を発生させた地震が同一の地震であるのか判断は出来ない、また、出雲地震との関係も特定することが出来ない。今後、山雲平野の他の地域で遺跡調査がなされる時、液状化跡が発見される可能性は高い。その時に、今回の液状化を発生させた地層との対比が出来れば、山陰地方の古い被害地震の履歴の解明に活用できることが期待される。

#### 地 震 資 料

##### (1)山雲地震 (M7.0) 880年11月23日 (元慶4年10月14日) (東経133.2度、北緯35.4度、深さ未決定)

山陰地方で記録されている最古の地震である。三代實錄には、「二七日丁未、出雲國言、今月十四日、地大震動、境内神社佛寺官舍、及百姓居廬、或頽倒或傾倚、損傷者衆、其後迄平十二日、晝一「度、夜三四度、微震動、猶未休止。」と出雲地方で寺社や官舎など人被害を出し、余震を伴った被害地震があったことが記載されている。そして、類聚國史には、「元慶四年十月一四日甲午、地大震」と、京都で同じ日に大きな震動があったことが記載されている。出雲地震が京都で有感であったため、地震のマグニチュードは最大級の7とされた。しかし、幾人かの研究者から、京都で感じられた地震は別のもので、それほど大きな地震ではないとの意見がある。この論議は荻原尊札著「古地震」に詳しく解説されているが結論を得るまで至っていない。そして、震央の位置についても諸説があり、「古地震」の木次町の南、また出雲大社の被害を強調すれば宍道湖の西が震央となり、出雲国府の位置から言えば飯石郡東山雲町付近と推定される。この資料では後者を採用している。

##### (2)浜田地震 (M7.1) 1872年3月14日 (明治5年2月6日) (東経132.1度、北緯35.2度、深さ未決定)

西日本で日本海に海底に発生したマグニチュード7以上の唯一の地震である。被害は全壊5000戸、死者600人以上で、島根県西部を中心に出雲地方、広島県にまで及んでいる。約1週間前から前震活動があり、本震に伴って地殻変動が起き、著しい海岸の昇降が見られた。そして、地震の後には名勝地「疊が浦」が出現していた。被害は無かったが小津波が発生した。この地震では出雲平野の各地に砂の噴砂現象が見られた。

##### (3)鳥取地震 (M7.2) 1943年9月10日 (昭和18年) (東経134.1度、北緯35.5度、深さ0km)

鳥取市に壊滅的な被害を与えた。死者は1083人で、全壊家屋は7485戸に達し、鳥取市が壊滅的な被害を受けた。鳥取平野や海岸の砂丘地では液状化に伴う砂噴出が見られた。この時、走行がほぼ

東西方向の二つの地震断層が出現した。吉岡断層は長さ4.5km、北側が最大50cm沈下し、東方へ最大90cm移動した。鹿野断層は長さ約8kmで、南南西翼では北が南に対して最大75cm沈下し東方へ150cmずれ、北北東翼では最大50cm隆起し西方へ少しずれた、螺番断層である。この時鳥取県東部では地震の前に発光現象が見られるなど、多くの前兆現象が観測された。余震は鳥取県中部に多く発生した。約半年前の3月4・5日に鳥取県沖地震(M6.1)が発生し、液状化現象が見られた。連発した地震活動は双子型と云われ、山陰地方の地震活動の一つの特徴と考えられる。

(4)南海地震 (M8.0) 1946年12月21日 (昭和21年) (東経135.6度、北緯33.0度、深さ20km)

四国・紀伊半島沖に発生したプレートの沈み込みによる巨大地震である。被害は広範囲に及び、強い地震動による倒壊家屋の被害、また津波が発生し、太平洋沿岸部に流出などの被害が出た。亡くなった人は1330人に達した。この地震で、約300km離れた山陰地方に震害が発生し、倒壊家屋と液状化が発生した。安政南海地震(1854年、M8.5)もほぼ同じ場所に発生した巨大地震である。

(5)島根県東部の地震 (M5.9) 1991年8月28日 (平成3年) (東経133.1度、北緯35.2度、深さ10km)

1970年代後半から山陰地方は地震活動が活性化し、1997・78には三瓶山周辺でM=6.1を最大とする地震活動があった。1983年には鳥取地震以来最大の鳥取県中部の地震(M6.2)、1985年の大山付近の地震(M4.9)、1989、90年には群発地震が鳥取県西部地域に発生して、北西一南東走行の断層系の活動としてM5クラスの地震が5回発生している。1991年8月27日にM=4.4が断層系の北西端に発生し、8月28日に島根県東部の地震(M5.9)が発生した。この地震は島根県東部の空白域に隣接している地域で発生した最大級の地震である。松江市で震度4を記録し、中海干拓地の松江市揖屋で液状化現象が発生し、畠地に亀裂と噴砂現象があった。

## 6. 山持川川岸遺跡の古環境

島根大学地質学教室 中村唯史

### 遺跡の立地

山持川川岸遺跡は出雲平野の北部に位置する（図1）。出雲平野は完新世の環境変遷に対応して地形発達した沖積平野で、おもに斐伊川と神戸川の三角州によって構成される。出雲平野の地形をみると、斐伊川と神戸川が山地から流れ出る地点を中心に沖積扇状地が発達し、出雲平野上の遺跡の多くは沖積扇状地上の微高地に立地する。山持川川岸遺跡は斐伊川の沖積扇状地の末端付近にあたり、島根半島から流れる新川に形成された伊勢谷扇状地の延長上でもあるが、後述するように遺跡の堆積層はおもに斐伊川に由来する碎屑物で構成されている。

### 基本層序

出雲平野の地下は最終氷期に形成された谷を埋める形で、内湾底堆積物の泥層が重なり、その上に斐伊川三角州、神戸川三角州の堆積物が重なる。三角州の堆積物はおもに砂からなる。

山持川川岸遺跡は出雲平野北東部の斐伊川三角州上に位置する。遺跡調査区の標高は4.1mである。調査区内の基本的な層序は、地表から約2m下に粗粒砂層があり、この上に細粒砂層、極細粒砂層、砂質泥層、粗粒砂層、近年の埋土の順で重なる（図2）。このうち、砂質泥層中に弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面が挟まれ、遺物が含まれる。砂質泥層は粒度と色調から数層に細分でき、含まれる遺物から上下で堆積時期に差が認められる。

最下位と遺物を含む砂質泥層の上位の粗粒砂層は、いずれも石英、長石、黒雲母を主体とし、花崗岩に由来する砂粒で構成されているとみられる。砂質泥層の上位の粗粒砂層には明瞭な斜交葉理が認められる（写真1）。また、調査区の全域で、最下位の粗粒砂層から発生した砂脈が上位の地層中に入り込んでいるのが認められた、砂脈が砂質泥層中で止まり、上位の粗粒砂層までは達していない。

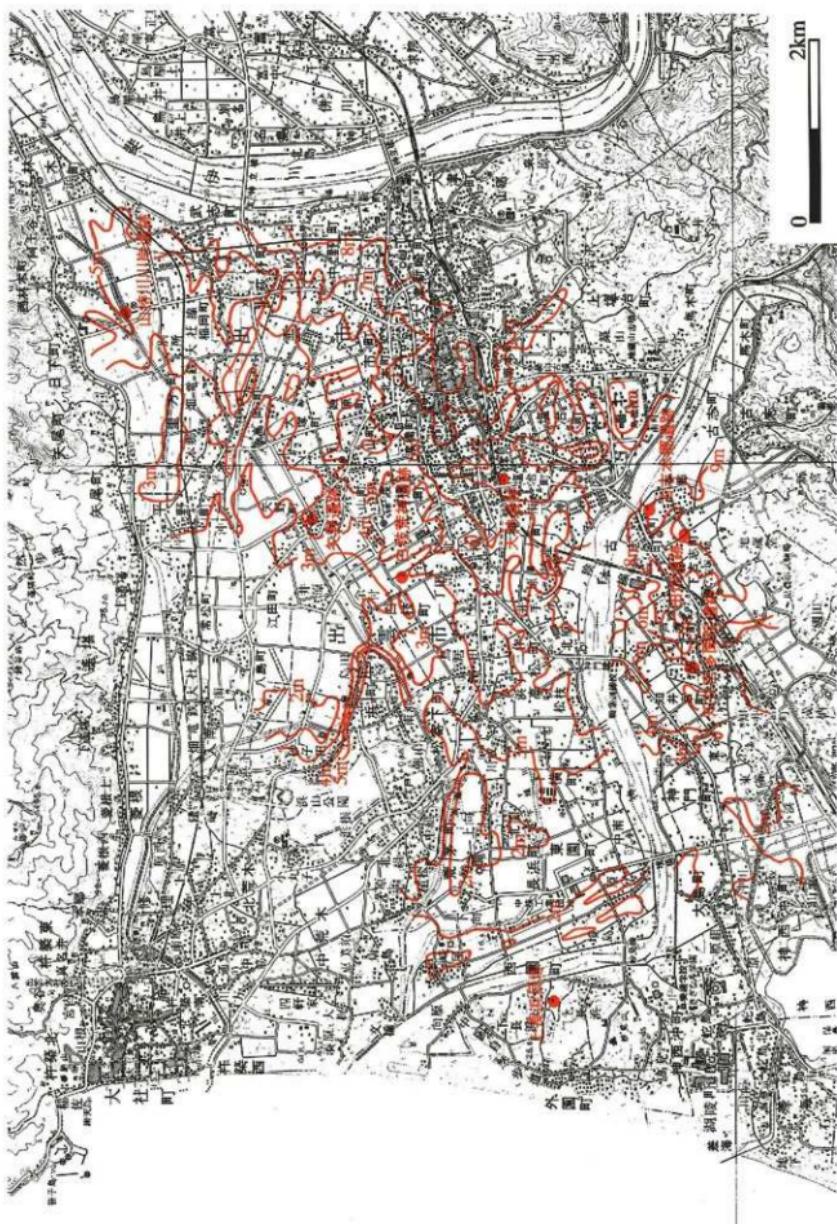
### 堆積環境

調査区内で最下位に認められる粗粒砂層は、構成する砂が花崗岩起源であることから、斐伊川からもたらされた砂と考えられる。遺物包含層である砂質泥層は細粒物から構成されることから、洪水時に氾濫した水流によって河川後背地にもたらされた細粒碎屑物が、間欠的に堆積したと考えられる。砂質泥層に重なる粗粒砂層は、明瞭な斜交葉理を示し、ある程度強い水流でもたらされ、堆積したと考えられる。粗粒砂層を構成する砂は花崗岩起源であることから、斐伊川からもたらされたと考えられる。

### 遺跡の時代の環境

出雲平野は、完新世の海面上昇（繩文海進）期には現在の宍道湖から人社湾へ通じる湾の一部であった。氷期に現在より数10m低かった海面は、氷期の終わった1万年前以降急上昇し、アカホヤ火山灰の降灰した6300年前（繩文時代早期末）頃には現在とほぼ同じ高さに達していた。アカホヤ火山灰は九州の南の鬼界火山の噴火によってもたらされた火山灰で、その地層は日本列島の広い範囲で確認されている。出雲平野ではアカホヤ火山灰層は標高-20～-30mの内湾性の泥質堆積物中に挟まれ、当時の出雲平野は、水深が20mを越える内湾の環境にあったと考えられる。海面は現在とほぼ同じ高さ

図1 出雲平野西部の地形



まで達した後は、小変動はあるものの停滞し、河川の三角州が前進し、平野が形成される。縄文時代後・晚期（4000～2300年前）には出雲平野上に遺跡が現しはじめ、この頃には出雲平野の原形が出来ていたことがうかがえる。また、内湾の湊奥部は海から遮断され、宍道湖の原形が出来た。

山持川川岸遺跡は、遺跡の営まれた弥生時代後期から古墳時代中期は、河川後背地の比較的安定した環境にあったと考えられる。その後、強い水流によってもたらされた粗粒砂層に覆われる。古墳時代中期以降のある時期に、斐伊川の水流が山持川川岸遺跡を直撃したと考えられるが、この砂層の堆積時期を示す遺物がなく、集落の放棄と砂層との関係は不明である。また、遺物包含層を貫く砂脈は地変動による液状化現象の発生を示すと考えられる。砂脈が弥生時代後期の遺物包含層を貫いていることは確実であるが、それより上位の層準と砂脈との層序関係ははっきりしない。したがって、地震の発生時期は古墳時代前期まで遡る可能性があるが、特定はできない。

### 斐伊川と遺跡立地

斐伊川は洪水をおこしやすい河川である。現在の斐伊川は大規模な堤防によって流路を固定されているが、大規模な堤防が築かれる以前の斐伊川は平野上を網状に分流して流れ、洪水を機に流路が大きく変わることがあったと推定できる。斐伊川は碎屑物の運搬が多く、天川河川となりやすい、洪水を機に流路が変わったとき、はじめは低地を流れるが、そこを流れるうちに低地は埋積され、むしろ周辺より高くなる。この状態で洪水が起きたとき流路は変化する。

集落は洪水の影響を受けにくい場所を選んで形成されたはずである。山持川川岸遺跡で集落が形成されたときには、斐伊川の河道から離れていたか、微高地であったと推定される。その後、堆積作用によって平野上の相対的な高低が変化し、集落を営むのに不適当な環境に変化したために集落が放棄された可能性が考えられる。

洪水頻度は、山地の開発の影響で変化する。燃料や建材として森林を伐採することによって山地の荒廃が進むと碎屑物の供給量が増大し、洪水頻度は増加する。弥生時代以降に水田開発や墳丘墓・古墳の建設などが行なわれ、さらに中世以降の斐伊川

流域では鉄穴流しによる砂鉄採取とたたら製鉄が山地の荒廃を招いた。山地荒廃とともに洪水の頻発は平野の地形を変え、集落が形成される場所はそれに応じて変化したと考えられる。

神戸川の沖積扇状地では欠野遺跡、天神遺跡などの大規模な集落遺跡があり、現在の市街地と遺跡の場所がよく一致するが、斐伊川の沖積扇状地ではそのような傾向は認められない。これは、斐伊川下流域の地形が、神戸川に比べ、より新しい時代に変化したことによると見える。

出雲神話に代表されるように斐伊川の洪水に関する伝承は多く残されており、斐伊川の洪水は古代以来、出雲地域の自然環境で最も重要なものであった

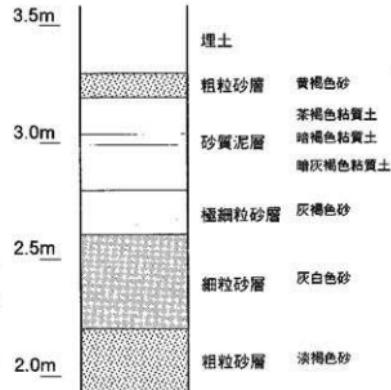


図2 山持川川岸遺跡の層序

と思われる。斐伊川下流域ではもともと集落が少なかつたのか、あるいは新しい時代の堆積層で覆われているのかは、古代出雲史の復元の鍵といえる。



写真1 粗粒砂層にみられる斜交葉理

## ま　と　め

山持川川岸遺跡からは、堅穴住居、掘立柱建物、土坑のほか、土器群（土器溜り）が検出されている。出土遺物も、コンテナ40箱分の多量の上器が出土しているが、この土器のほとんどは、弥生時代後期後半の土器である。これら遺構に伴う遺物は、多少の混入はあるものの、ほぼ一括した廃棄状態を示しており、この遺構における推移を、概ね辿ることができ、山持川川岸1期～5期に区分することができる。なお、遺構に伴わない包含層からの出土遺物もかなりあるが、この変遷図には含まれていない。

### 山持川川岸1期

遺物としては、この時期よりも古いものはあるが、遺構の中では、最も古い時期に属する。土器群5から出土した土器で、広口壺と甕がある。広口壺は、複合口縁部に、貝殻腹縁による擬凹線文を施し、器肉がやや厚手の土器で、底部を穿孔した祭祀関連遺物である。甕は、複合口縁部に擬凹線文を施し、体部の形態は倒卵形を呈する。体部にヨコ方向のヘラミガキを施すことを特徴とし、底部はやや厚い平底である。

松江市の場土壤墓出土資料や草田3期が、この時期に相当すると考えられる。<sup>(注4)</sup>

### 山持川川岸2期

この時期の遺物としては、土器群7、上器群8が概ね主体となる。甕の複合口縁外面から擬凹線文が消え、複合部の稜が、やや斜め下方に突出する特徴をもつ。

平所1号住居址、草田4期がこの時期にあたると考えられる。<sup>(注5)</sup>

### 山持川川岸3期

山持川川岸遺跡の中核となる時期で、SK01、SK03、SK04、土器群3、土器群4、土器群6が概ねこの時期に属すると考えられる。広口壺では、口縁を薄く引き出した形態をとるのが一般的だが大形土器では、口縁端部が平坦なものも出現し、これは甕にもその傾向が窺われる。甕も、形態的には広口壺と同様だが、底部は微かな平底である。低脚壺は、この時期に、さまざまなタイプのものが現れる。厚手の小形品は、やや古い様相をもつほか、坏部がかなり深く、低脚部内面にケズリ調整を行なうもののがみられる。また、搬入系遺物が認められるのも、この時期からである。

安来市鍵尾A～5号墓出土資料や草田5期が、この時期に該当すると考えられる。<sup>(注6)</sup>

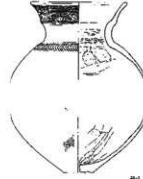
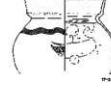
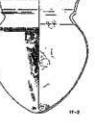
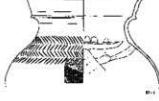
### 山持川川岸4期

SK02、SI01、SB01がこの時期と考えられ、広口壺は、口径が大きく外反し、頸部の長いタイプのものがみられる。低脚壺は、3期にみられた坏部の深いものもみられるが、低脚部内面のケズリ調整はない。搬入系遺物も、引き続き伴っている。

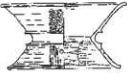
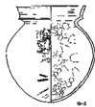
東出雲町大木櫛現山1号墳1号土壤資料や草田6期が、この時期に該当すると考えられる。<sup>(注7)</sup>

### 山持川川岸5期

土器群1がこの時期にあたると考えられるが、複合口縁の稜はヨコ方向に突出し、端部は平坦面をなす。体部の球形化が進み、底部は完全な丸底になるが、ごく一部では微かな平底の痕跡を残すものもある。遺物の中に、布留甕の特徴をもつ土器もあり、土器群の中では、唯一、古墳時代前期初頭の

各期	基準遺構	広口壺	壺	器台	低脚壺	高壺	攝入系遺物
1	土器群5						
2	土器群7						
2	土器群8						
3	SK01						
3	SK03						
3	SK04						
3	土器群3						
3	土器群4						
3	土器群6						

第42図 山持川川岸各期遺物変遷図(1)

各期	基準遺構	広口壺	壺	器台	低脚壺	高壺	搬入系遺物
	SKO2						
4	S101						
	SBO1						
	土器群1	    					

第43図 山持川川岸各期遺物変遷図(2)

ものである。しかし、土器群のうち、3と4は微かな平底を痕跡的に残すなど、古い様相もみられるので、これらは山持川川岸4期に含まれる可能性もある。

(註9)

安来市小谷遺跡出土資料や草田7期がこれに該当すると考えられる。

山持川川岸遺跡の大きな特徴は、弥生時代後期後半の一時期に、爆発的に集落が広がり、短期間に廃絶した点にある。その原因については、遺跡をとりまく自然環境があげられる。<sup>(註10)</sup>山持川川岸遺跡は現在は扇状地末端付近の水田で、周りから水が集まる低湿地であるが、地質学的調査により、遺跡のベースは、扇状地よりも、斐伊川が運搬し堆積した河川碎屑物の上に立地していることが確認されている。当時の生活面の標高は約2.8mで、出雲平野の弥生遺跡の中では低い方であるが、遺物を包含する層は粘質土で、とても現状では生活できる環境ではない。しかし、堅穴住居、掘立柱建物などがあることから、当時は、地下水位がもう少し低く、生活に適した環境であったことが窺われる。それが、弥生後期の海面低下に直接起因するかどうかは断定できないものの、こうした地下水位の変化が、遺跡の消長に影響を与えたであろうことが考えられる。

出土遺物の面では、調査面積の割には、遺物量が多いことが特徴的である。その遺物も、時期的には弥生時代後期後半に集中し、完形か、それに近い土器も数多く出土しており、遺物の保存状態はかなり良好であった。器種としては、甕以外の器種もかなり幅広くみられたが、特に上器群3にみられる低脚杯の多様性は興味深い。また、甕のうち、器高が40cmを超える大形品がいくつか出土していることも注目される。それらは、いづれも複合口縁の端部に平坦面をつくり、体部は倒卵形を呈し、底部は平底である。さらに、この時期には、畿内、九州、瀬戸内方面など、他地域との交流も活発化したことが、出土搬入土器から窺うことができる。

土器への施文で注目すべき点は、局部的な施文がみられることで、土器群1の甕(13-3)は、複合口縁の外面に、部分的な列点文が施され、また、甕(13-4)には、外面肩部に短い沈線がタテに数条ある。

このように、山持川川岸遺跡は、僅かな調査面積であるにもかかわらず、貴重な数多くの知見が得られている。弥生時代終末から古墳時代前期初頭の変遷については、最近市内の正蓮寺周辺遺跡で、良好な一括資料も出土しているので、出雲平野における土器編年も、近い将来新たな展開が予想される。

#### 注

1. 「原の前遺跡」 島根県教育委員会(1995)
2. 松本岩雄、正岡睦夫編『弥生土器の様式と編年』 -山陽・山陰- 木耳社(1992)
3. 『南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会(1992)
4. 近藤正、前島乙基「島根県松江市の塙土壤墓」『考古学雑誌』第57巻4号(1972)
5. 「平所遺跡!」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』  
島根県教育委員会(1976)
6. 山本清「山陰の土師器」(『山陰古墳文化の研究』所収)(1971)
7. 『大木権現山古墳群』 東出雲町教育委員会(1979)
8. 次山淳氏から、布留0式もしくは布留1式の特徴をもつとの教示を得た。
9. 内田才、東森市良、近藤正「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化』36(1966)
10. 中村唯史「山持川川岸遺跡の古環境」『山持川川岸遺跡』(1996)

# 土器観察表

〔器種については、弥生土器、土師器以外、また出土地点については、暗灰褐色粘質土以外の土層は記載〕

種 番 号	器 種	出土地点	形態・調整等の特徴	押 出 番 号	器 種	出土地点	形態・調整等の特徴
5-1	甕	SK01	外面に、平行線文、列点文。 内面頭部以下ケズリ。	9-1	広口甕	SK03	やや外側に薄く伸びる口縁。内面頭部に指頭圧痕。
2	甕	SK01	外面に列点文。 内面頭部以下ケズリ。	2	甕	SK03	やや外反し、丸い端部の口縁。 口縁外面に貝殻腹縫による擦凹跡。
3	甕	SK01	薄く引き出す口縁。 口縁内面中ほどに後。 内面頭部以下トケズリの ちミガキ(?)。	3	高坏(?)	SK03	形態不明。 内面にミガキ。 端部は貝殻腹縫による擦凹跡。
4	甕	SK01	外面に列点文。 内面頭部以下ケズリ。	11-1	甕	SK04	かなりの大形品。口縁は垂直に立ち上がる。端部はやや傾いた平坦面。底部は倒卵形で、平底の可能性大。
5	甕	SK01	外面に列点文、平文線文。 内面に大きなケズリ、頭部に指頭圧痕。	2	甕(?)	SK04	口縁は列点文。 体部外面に列点文。 全体的に縦付着。
6	甕	SK01	大きく述べ外側に開く口縁部。 薄く引き出す口縁、丸い 端部。	3	器台	SK04	上台のみ。
7	器台	SK01	下台のみ。 内面ケズリ。(左→右)	4	高坏	SK04	脚部外面へケメ。 内面ケズリ。
8	高坏	SK01	脚部は少し外側に膨れる。 タテ方向のミガキ。表面 かなり摩耗。	5	低脚坏	SK04	6と同一個体。 接合部に刺突痕。 内外面ともミガキ。
9	高坏	SK01	脚部外面にタテ方向のミ ガキ。 内面にケズリ、ハケメ。	6	低脚坏	SK04	5と同一個体。 底部に挿入する接合方法。
10	低脚坏	SK01	かなりの人形品の低脚部。 内外面ともナダ。	13-1	甕	土器群1	口縁端部は平坦。複合部 の構造は横に強く突出。丸 底。内面底部に指頭圧痕 が多い。
7-1	甕	SK02	口縁端部肉厚で丸い。 内面底部に列点文は部分的で続かない。	2	甕	土器群1	口縁端部は、やや内側に 傾いた平坦面。内側に 一条の沈線。内面頭部と 底部に指頭圧痕。丸底。
2	甕	SK02	内面底部に指頭圧痕。 微かな平底。(ハケメあり)	3	甕	土器群1	口縁外面の一部に列点文。 口縁端部に平底。 内側に指頭圧痕。底部に 指頭圧痕。微かな平底。
3	小形甕(?)	SK02	口縁は内弯して細く尖がる。 胎土が在地のものと異なり、 搬入系遺物。	4	甕	土器群1	小型品。外面肩部に準分 的な沈線。内面底辺に指 頭圧痕。微かな平底。外 面赤色塗彩(?)。
4	高杯	SK02	脚部と杯部の接合は円盤 充填。杯部内面ミガキ。 脚部外面ミガキ。内面ケ ズリ。	5	甕	土器群1	単純口縁。口縁端部を内 側に少し肥厚。内面にケ ズリ。底部指頭圧痕。丸 底だが少し尖り気味。
5	低脚坏	SK02	低脚部とでもいいくべき深 い环部。环部外面ハケメ。 内面ミガキ。低脚部に2 脚1対の小孔あり。	6	甕(?)	土器群1	手捏土器。 指頭による成形痕多し。 平底。
6	低脚坏	SK02	口縁端部下にくびれのあ る环部。 外側ハケメ。内面ミガキ。	7	器台	土器群1	外面ナダ。 内面に上台ミガキ。下台ケ ズリ。
7	低脚坏	SK02	内外面ナダ。 2脚1対の小孔あり。	15-1	甕	土器群2	外雨程いいハケメ。 底底ある。内面頭部以下 ケズリ。 単純口縁。

掲番 図号	器種	出土地点	形態・調整等の特徴	掲番 図号	器種	出土地点	形態・調整等の特徴
15—2	高坏	土器群2	内外面を赤色塗彩。	18—11	小型丸底壺(?)	土器群3	口縁は、内窪し、端部が尖る。擦入系遺物。
3	鉢(?)	土器群2	手程土器。凹凸が激しい。	12	脚付壺	土器群3	外面ハケメのち細かいミガキ。内面ハケメのちナデ。指頭圧痕のような凹みあり。脚部なし。擦入系遺物。
4	甕	土器群2	底部の一部。焚口はやや平坦。	13	器台	土器群3	ト台にくらべて、上台はかなり高い。
5	甕	土器群2	底部。内面ヨコ方向の粗いケズリ。	14	高坏	土器群3	脚部のみ。外面ミガキ痕耗耗。かなり精選された胎土。
7	須恵器环身	土器群2	内外面ヨコナデ。	15	高坏	土器群3	脚部のみ。外山開削部の接合面を指頭でおさえたのち、ハケメ。赤色塗彩の跡模様。
8	須恵器蓋	土器群2	内外面ヨコナデ。	16	高坏	土器群3	外面に赤色塗彩残る。ハケメのちミガキ。内面指頭圧痕成形のちミガキ。中央部分剥落。内盤充填。
9	甕	土器群2	端部を内側に肥厚。	17	低脚环	土器群3	低脚部にくらべ、かなり大きな环部を有する。环部内外面ミガキ。(細かい)低脚部外面ハケメのちナデ。
17—1	広口甕	土器群3	大形品。口縁端部は平坦。(中央がやや凹む)外面肩部に波状文。内面頸部に指頭圧痕。	18	低脚环	土器群3	厚い器内の状。外面に細かなミガキ。口縁付近に穂。
2	甕	土器群3	外面全体に模付着。内面頸部及び底部に指頭圧痕(少ない)底部微かな平坦。	19	低脚环	土器群3	外面ともハケメのちミガキ。器内薄く、やや白っぽい。
3	甕	土器群3	丸味のある口縁端部。外山肩部に波状文。内面頸部以下に大きなケズリ。	20	低脚环	土器群3	外面口縁付近はヨコ方向のミガキ。その下はタテ方向のミガキ。内面は、外面よりも粗いミガキ。
4	甕	土器群3	外面肩部に平行線文。内面頸部に指頭圧痕のちナデ。それ以下はケズリ。	20—1	広口甕	土器群4	外面頸部に平行線文。肩部に列点文。内面頸部に指頭圧痕。それ以下にケズリ。
5	甕	土器群3	丸味のある口縁端部。外面に緩い波状文。のちハケメ。	2	甕	土器群4	外面頸部にハ字状の列点文。かなりの大形品。
6	甕	土器群3	外面肩部に上部の版幅の少ない波状文。体部の器肉かなり薄い。	3	甕	土器群4	口縁はほぼ垂直に立ち上がり、端部は平坦。複合部の壁は緩やか。
7	甕	土器群3	外面肩部に緩い波状文。内面頸部以下ケズリ。(左→右)	4	甕	土器群4	口縫は外側へ開き、端部は丸い。体部外面に波状文。
8	甕	土器群3	かなり外側に聞く口縁。外面に、平行線文、波状文、列点文の順に施文。体部下半に模付着。	5	甕	土器群4	口縁はかなり外反するが、端部はやや平出。
9	甕	土器群3	丸い口縁端部。外面肩部に模付着。	6	甕	土器群4	口縫端部は、やや斜めだが、平坦。体部外面の波状文は、かなりみあわない部分がある。
10	甕	土器群3	丸い口縁端部。全体的に模付着。内面ケズリがかなり明瞭。	7	甕	土器群4	口縫端部は、平坦。外面肩部に列点文。

器番号	器種	出土地点	形態・調整等の特徴	押番号	器種	出土地点	形態・調整等の特徴
20-8	甕	土器群4	口縁は薄く引き出山形態。ハケメのうち、肩部に波状文。内面ケズリ。(左→右)	26-5	器台	土器群6	外面上台と下台の端部がやや長い。外面ナデ。内面上台ミガキ。下台ケズリだが端部のみナデ。
9	甕	土器群4	小形品。口縁は端部丸く、外側に開く。	6	器台	土器群6	5よりやや小さい。外面上台と下台の筒部中央がやや弓字形で内側に引っ込んでいる。
10	甕	土器群4	器肉が薄く、広く緩やかな平底。内面に指頭圧痕。	28-1	広口甕	土器群7	やや外側に開く口縁で端部は丸い。内面頸部に指頭圧痕。
21-11	器台	土器群4	下台のみ。外面上台と下台の筒部がやや幅がある。	2	甕	土器群7	口縁内面は、中央が膨らみ、端部は薄く、丸い。
12	器台	土器群4	中央筋部のみ。下台内面ケズリ。(左→右)	3	甕	土器群7	口縁外表面は、ややナデによる凹凸があり。端部丸く、膨らみがある。
13	高坏	土器群4	口縁端部やや折れで外反。外表面ヨコ方向の筋かな。ガタ。内面は筋かな。端部のガタ及び浅い成形跡。指頭圧痕。接合は円滑光沢。	4	甕	土器群7	やや小形品。内面頸部に指頭圧痕。
14	低脚坏	土器群4	环部はやや内寄し、端部に寄る。接合部付近はタテ方向。内面ともミガキ。(表面磨耗)	5	高坏	土器群7	环部外表面ヨコ方向の細かいミガキ。接合部付近はタテ方向。内面はほとんどタテ方向の細かいミガキ。
15	低脚坏	土器群4	底部が小さく、大きく開くタイプ。内外面とも环部はミガキ。低脚部はナデ。	6	高坏	土器群7	环部内外面ともヘラミガキ。脚部外表面ミガキ。内面指頭圧痕。
16	低脚坏	土器群4	口縁部が曲折して開く。通有の筋かな。内面が厚く、端部が厚い。内面とも、环部はミガキ。低脚部は外面ナデ。内面ケズリが特徴。	30-1	広口甕	土器群8	口縁の複合部と端部はおむね平坦。頸部内面に2段の指頭圧痕。外表面は、ハケメのち波状文。
17	(注口部)	土器群4	体部から折削して残ったもの。ハケメ。	2	甕	土器群8	複合部の縁が突出せず、端部の丸い脚部外表面に、クサブリ具による波状文。
23-1	広口甕	土器群5	口縁部は直折して開く。通有の筋かな。内面が厚く、端部が厚い。内面ケズリがある。	3	甕	土器群8	口縁端部はやや薄くなり、外反する。
2	甕	土器群5	口縁部の下間に横線波状文。体部外表面にヨコ方向のミガキが特徴。底部(平底)は小さく、やや不安定。	4	甕	土器群8	や立ち上がりた厚手の口縁。端部厚く丸い。複合部の後はやや下方に突出。
3	甕	土器群5	外面肩部に列点文。体部は、やや膨らんだ倒卵形で、節微弱。底部は平底。	5	甕	土器群8	器肉は薄いが、口縁端部は丸く、複合部の縁は下方に緩く突出。
25-1	甕	土器群6	器高約10cmのやや大きな甕。上縁は内側に開く。内面は内側向外に丸く引く出す。体部は輪郭形で、底部は幾つか平底。内面底部に指頭圧痕している。	32-1	広口甕	S I O 1	大き外側に開く口縁で、端部はやや丸味があるが平坦。複合部の縁はやや下方に緩く凹出。頸部内面に4段の指頭圧痕。
26-2	甕	土器群6	器高約10cmのやや大きな甕。上縁は内側に開く。内面は内側向外に丸く引く出す。体部は輪郭形で、底部は幾つか平底。内面底部に指頭圧痕。	2	広口甕	S I O 1	1とほぼ同じだが、口縁内面のヨコ方向のミガキが特徴。
3	甕	土器群6	やや外側に開く口縁。外面肩部に平行線文、波状文。	3	広口甕	S I O 1	頸部外表面に羽状文。内面に指頭圧痕。内面頸部以下のケズリは小さい。
4	甕	土器群6	やや外側に開く口縁で、端部は丸い。肩部外表面の平行線文は1.5cm間隔で3帯。	4	甕	S I O 1	形状不明。類例少ない。複合口縁。内外面にハケメ。

番号	器種	出土地点	形態・調整等の特徴	番号	器種	出土地点	形態・調整等の特徴
33-5	壺(?)	S101	口縁は、貝袋状縁による 掘削痕文。底部丸く丸い。 体部外面下部にミガキ。	36-3	広口壺	C2	内側した袋状口縁の十唇。 頸部は丸味あり。 底部が在地のものと異り、 陶器色で、土色と違離する。 白色粒子を多く含む。
6	壺	S101	口縁端部丸い。縁は横に 突出。頸部内面に指頭圧痕。	4	広口壺	C3-C4 セクションベルト	口縁は、貝袋状縁による 掘削痕文。頸部外側に羽 状列点文。内面に指頭圧痕。
7	壺	S101	口縁端部やや平坦。 肩部外面の波状文は幅狭く、 振幅大きい。	5	広口壺	C3	口縁部に半截竹管文を施 文。頸部外面に大きな列点文。 内面に指頭圧痕。
8	壺	S101	口縁端部やや内傾し、平 坦。頸部内面に指頭圧痕。 やや小形で体部が膨らむ タイプ。	6	広口壺	C2	複合口縁部は内側し、 複合部の縁と端部は平坦。 頸部内面にタテ長の指頭 圧痕。
9	壺	S101	単純口縁。調整は不明瞭。 やや丸味がかった淡黄褐色 で磨擦された胎土。在地の ものと異なり、腹部は 波状文。底部は、鍛やかな平底。	7	広口壺	C2	複合口縁部は内側し、 複合部の縁と端部は平坦。 頸部内面にタテ長の指頭 圧痕。
10	壺	S101	9よりもやや小さい單純 口縁の波状文遺物。 やや丸味がある。胎土と 調整は、在地の土胎と 似ている。	8	広口壺	C2	やや口径の小さな内傾す る口縁をもつ。調整は丸く、 緩もあまり尖出しない。 頸部内面に指頭圧痕。
33-11	器台	S101	外面上・下台とも、ナデ ののち、タテ方向の細かな ミガキ。下台中央やや 上に4か所、小孔を貫通。	9	広口壺	A3	内傾する複合口縁部をも ち、端部は平坦。 頸部外面に、羽状の列点 文。
12	器台	S101	下台の下半は欠損。	10	広口壺	C3	内傾する複合口縁部をも ち、端部はやや丸味あり。 頸部内面に指頭圧痕。
13	器台	S101	小形品。 上台の上半欠損。	37-11	壺	A4	太く深い凹線文を施文し た口縁部。 器内に焼けヒビが入って いる。
14	高壺	S101	环部中ほどに複合部の残 り、端部はやや平坦。 内外面にナデののち、ミ ガキ。	12	壺	B2-C2 セクションベルト	口縁は薄く引き出される ものの、端部は丸く反する。 口縁外面に波状文。
15	高壺	S101	内外面にヨコ方向の細かな ミガキ。环部口縁部はや や平坦。内面端部下に成形 時の指頭圧痕。内盤充填に より複合。	13	壺	A2	立ち上がった口縁外面に 波状文を施し、端部は丸 い。 頸部内面に2列の指 頭圧痕。
16	高壺	S101	やや立ち上がる環部の内 外面にミガキ。 胸脚部を环部へ挿入して 接合(?)	14	壺	A4	短く立ち上がる口縁部。 山持川里遺跡では類例 なし。端部やや平坦。 頸部内面に指頭圧痕。
17	壺	S101	つまみ部に凹線文。 内外面に細かなミガキ。	15	壺	C3	口縫端部は、底盤は平 底で、やや丸味があり。 (直角不規) 内面は大きな ケリ。底盤付近は大きな 指頭圧痕。 側面の成形部の凹線。
35-1	広口壺	SB01	立ち上った口縁の端部は、 ほぼ平坦。 内面頸部に、指頭圧痕。 やや大形。	16	壺	C3-C5 セクションベルト 茶褐色粘質土	口縫端部がやや外傾する単純 口縁。外底削り下にタ キ模様。頸部が凹むが丸味あり 。丸底で、内面底部付近 に指頭圧痕。
2	壺	SB01	端部が丸い。	17	壺	C2	口縫端部の内側を少し肥 厚させた単純口縁の上器。 内面頸部に指頭圧痕。
36-1	広口壺	B5	口縁は3条の凹線文。 器肉は厚く、頸部外面に は、凹線文と刻目文を交 互に施文。	18	壺	B3	かなり内寄し、袋状になっ た単純口縁の器。体部の膨 らみにくらべて口縁がかな り短い。粗劣のない器形。
2	広口壺	A4	口縫部に山形文(中に斜 行線)を施す。	38-19	壺	B1	口縫端部に記入して記入した 単純口縁の上器。(中ほど に波状) 動植物波状文色 で、在地のものと異なる搬入 系遺物。

番 号	器 種	出土地点	形態・調整等の特徴	番 号	器 種	出土地点	形態・調整等の特徴
38-20	壺	C 3	口縁端部を内側に肥厚させた単純口縁の土器。胎土が粗く、搬入系遺物の可能性あり。	38-37	器 台	B 5	上台と下台の間の筒部がやや長い。
21	壺	A 1	退化した短い複合口縁。	39-38	高 壕	B 3	壺内部外面にミガキ。壺部と脚部との接合は、円錐充填。
22	小形丸底壺	C 3 茶褐色粘質土	端部が細くなった単純口縁。体部外面ハケメ、内面粗いケズリ。	39	高 壕	A 1	直線的に斜めに広がる壺部。内外面ともミガキ(不明瞭)。
23	小形丸底壺	C 3	22より長い口縁。体部内面上面に精調干施、下部にケズリ。	40	高 壕	A 1	外面赤色透彩。壺部中ほどに大きな屈曲あり。接合は脚部の挿入(?)。
24	小形丸底壺	B 3	体部中ほどにやや屈曲がある。体部内面にかなり粗い凹凸がある。	41	高 壕	C 3-D 3 セクションベルト	壺部の腹部は、細く大きめの外反。環部の底にコブ状突起があり、脚部にさして接合か? 胎土が異なり、搬入系の可能性あり。
25	小形丸底壺	A 3	体部中ほどは急に屈曲する。胎土が在地のものと異なる搬入系遺物。	42	高 壕	A 2	壺部内部胎部下に明瞭な段差があり頭部付近やや厚手。内外面ともミガキのものか、赤色透彩?
26	小形丸底壺	C 4	頭部内面に指頭丘痕。体部内面のケズリはかなり粗い。	43	高 壕	C 2	浅い环部。接合は円盤充填。在地のものと胎土異なり、搬入品(?)。
27	小形丸底壺	試掘 4 T	胎土が精選され、淡灰緑褐色を呈し、在地の上層と異なる搬入系遺物。頭部内面上部に指頭丘痕。	44	高 壕	C 2	器肉の厚い細部。やや紫っぽい色調で、搬入品の可能性ある。
28	壺	A 2	やや厚く、大きい平底。外面ミガキ、内面指頭丘痕。	45	高 壕	C 2	端部近くで大きく開脚。径1cmの円形透しが3方に穿たれている。胎土が異なり、搬入系遺物。
29	壺	B 4	小形品。底部が高台状の特異な上器。外面ミガキ、内面ケズリ。	46	高 壕	C 2	45と似ているが、胎土が在地のもの。3方に円形透しあり。
30	壺(?)	A 4	胎土からみると搬入系遺物の可能性高い。高台状のものと内外面ともミガキ。	47	須恵器高環 茶褐色粘質土	C 2	接合部付近にタテ方向に1本の沈線。
31	壺	C 5-D 5 セクションベルト	平底に、両側からの焼成前の穿孔(径0.8cm)あり。	48	高 壕	C 3	端部付近で急に外側へ屈曲。外面ハケメ。
32	壺(?)	B 5	高台に、径0.3cmの小孔が貫通している。体部内面はミガキ。体部内面は黒くなっている。	49	低脚壺	A 1	やや深い环で、内外面ともミガキ。环の端部は平坦。低脚壺内面は粗いケズリ。
33	器 台	A 1	外面全部と内面のりを赤色透彩。長い横筋の外縁ハケメ、内面ミガキ。施墨は撲凹文。内面ケズリ。	50	低脚壺	C 2	环部口縁部屈曲し、内面に平坦部。内外面とも、タテ方向のミガキ。
34	器 台	試 壺 (C 5 付近)	やや小形品。底部に列点文、平行線文を施す。	51	低脚壺	B 1-B 2 セクションベルト	口縁端部から2cm下でやや屈曲。内外面ともミガキ。
35	器 台	C 2	小形品。上台部の端部を欠損。	52	低脚壺	C 1	大きく、低く開く壺部をもつ。内外面にタテ方向のミガキ。
36	器 台	A 3	上台と下台を器台と接合するときにできた凹凸が内面にある。下台の端部付近に、局所的な列点文あり。	53	低脚壺	C 2	中形品。内外面ともミガキ。



# 図版

山持川川岸遺跡付近航空写真  
(中央が調査地)



遺跡近景（西から）





発掘調査区全景  
(調査前)



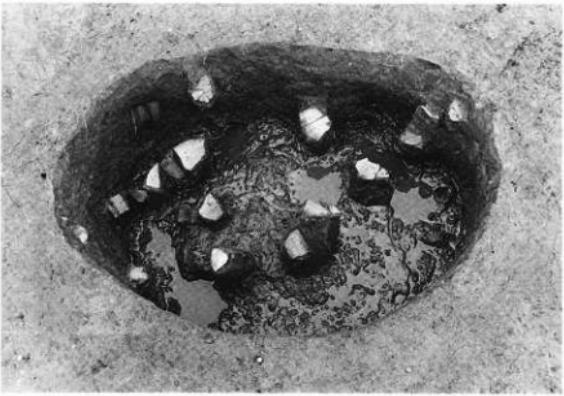
発掘調査風景（南から）



SK 01 遺物出土状況



SK 02 調査風景



SK 02 遺物出土状況



SK 03 遺物出土状況



SK04 遗物出土状况



土器群1（全体）



土器群1（部分）



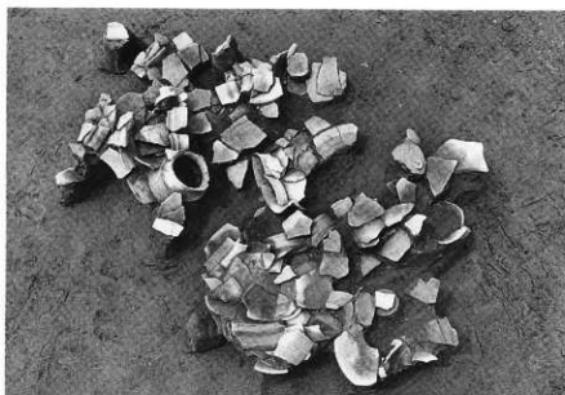
土器群 2 調査状況



土器群 2



土器群 3



土器群 4（全体）



土器群 4（部分）



土器群 5



土器群 6



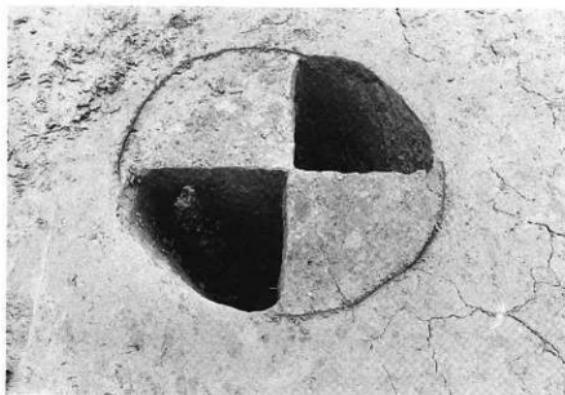
土器群 7



土器群 8



S B 0 1



S B 0 1 柱穴内柱根



S I 0 1 調査風景



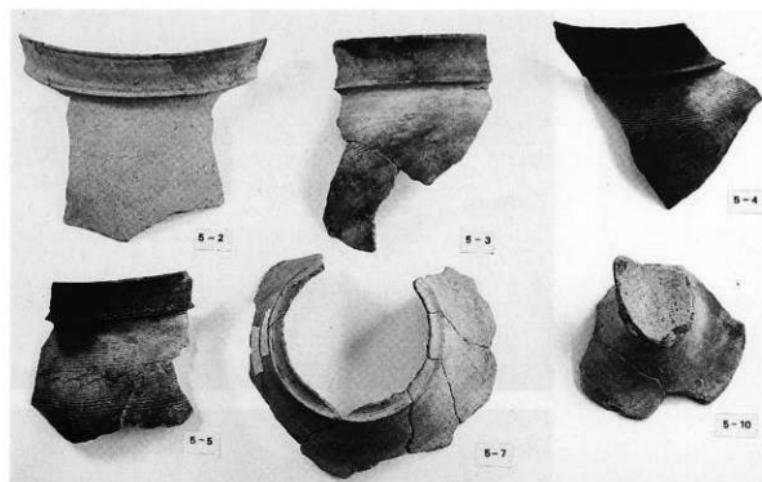
S101 遺物出土状況



落ち込み状遺構  
(SX01)



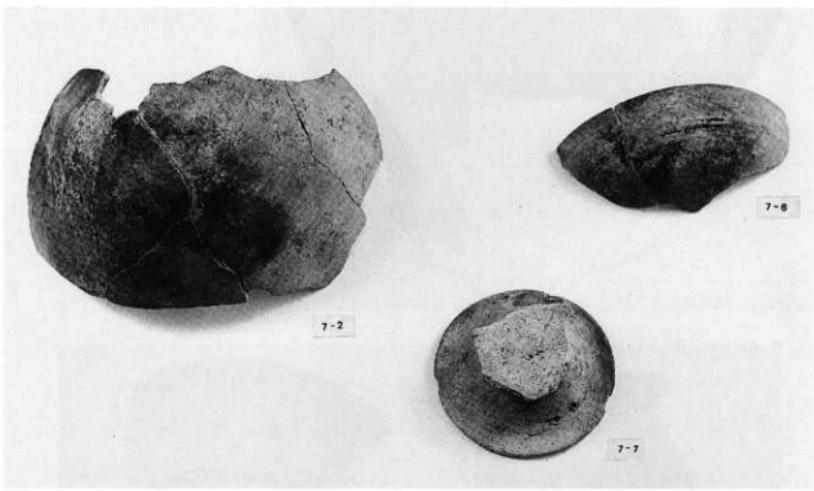
噴砂（右側）と落ち込み状  
遺構（左側）



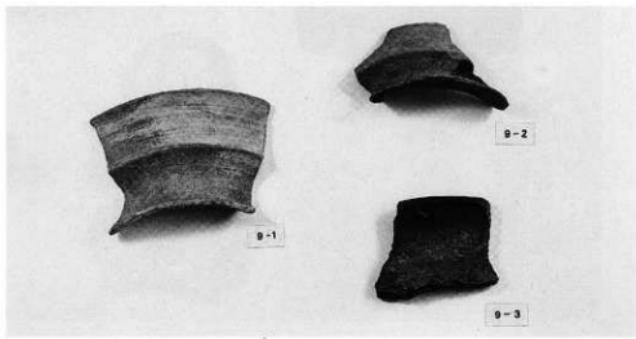
SK 01



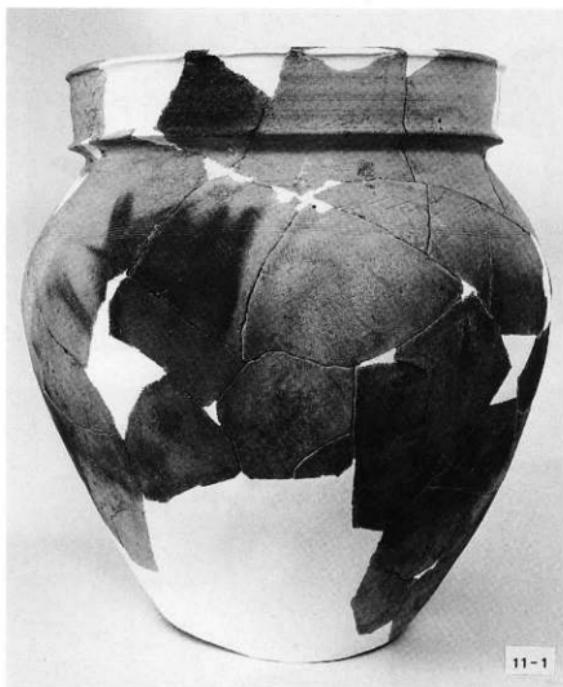
SK 02



SK 0 2



SK 0 3



SK 04

